

そこで蓮如上人の御教訓の打止め、「我身をひとつ勸化せぬものがあるべきか」と御誠めなされたのであります。

### 第十壹回 かたびら一枚の了妙

一。人生を、楽しく暮すのも我心、苦しく暮すのも我心、我が現在の境遇を、不幸ぢやと思ふも我心、幸福ぢやと思ふも我心、此心が、苦樂悲喜の分るゝ基で、心己外に、苦樂の事物があるものではない。雨の晴れ際に、五色を彩つた虹が起る。遠方から見て居ると、いかにも美麗に見ゆる。その美麗な虹を、手に握りたと思ふて、近づいて見れば、手に取るべき虹もなく、また五色の光りもない。自分の立場から、他人の身の上を見ると、いかに

も楽しさうに、面白さうにある。然かし他人から羨やまれて居る人も、相變らず人生の苦悶を懐いて居る。近づいて見れば、富貴の下に眞正の虹なく、浮世の夢に眞正の五色もない。唯遠方から見ると、美麗に見ゆるのみである。他人を羨み、人生を悲觀し私のやうな不幸の者はないと、我身の運命をかこつ人は、遠方の虹の影を羨まんより、我心の修養に着手せねばならぬ。往昔、高麗國に、元曉法師と申す御方があつて、遙々唐の國に道を求めんと、なれし故郷を踏み出して、旅路の人となりました。或日の事野路に行き暮れて、終に野宿をいたしました。夜中に渴を覺て堪へられぬ。日中の旅に疲れて居るから、咽の渴きが甚しい。そこで夜中に起き上つて、草原の中を手探りして、何處かに水はな

いかど、尋ね廻つて居る中に、水氣のある所に探り當てた。非常に喜んで、兩手を以て水を掬ひ、心の行くほど飲みましたので、渴きも留まり、精神も爽かになつたので、再び草を枕にして眠りに就きました。心地よく一夜の夢路をたどつて、翌朝出發に臨んで、昨夜の水は何處であつたかと、そこら邊りを尋ねて見ますと豊圖らんや、昨夜野宿をした所は荒涼たる墓場であつて、清水と思ふて飲んだものは、死人の屍の腐爛したる所に、雨水の溜つたものであつた。然かも其水の中には、數多の小虫が湧いて居る。それを見て、嗚呼いやだなと、一念思ふや否や、忽ち腹部に異状を感じて、昨夜の水を一度に吐き出してしまつた。草の上に端坐して、沈思すること數刻、忽ち空中の聲を聴て、飄然として悟つ

て申すには、苦樂は心に在り外に在らず、徒らに萬里の途を踏んで、異域の人を尋ねんよりも、退いて我心を修むるに若かす。それより直ちに踵を回らして、元の故郷に歸り、一心に道を修めたと申すことである。これは清澤先生の大變好きな御話で、いかにも先生の喜びそうな物語である。人生の苦樂悲喜は、外に在るのでなくて、我心に在りと云ふ事が、此御話に由て、頗る明了に分ります。彼の元曉法師、夜中に水を飲んで結構な水ぢやと思ふた時は、精神も爽かに、腹の心地も頗る宜い。一朝不潔の水と思ふや否や、腹中の天地に大變動を起すと云ふのは、水に前後の差別があるのではない、唯心の思ひやうに差別があるのである。若しも我心を修めずに、人生の歡樂を求めんと欲し、または他人の

富貴榮華を羨んで居るならば、雨後の虹の影を追ふと同じことである。

二。近來の出来事であるが、この元曉法師の事と、全く同じ性質の御話があります。これは、最近に米國から歸つた、某醫師の御話であります。米國の西部に在つた、事實の御話と申す事である。一婦人が、春の時分に花見に参りまして、少し酔心地で我家に歸りました。やがて寢に就きましたが、酒の醒める時の事とて頻りに渴を覺ゆる、そこで寢床の中から下女を呼んで、清水を持ち來らしめました。下女は命に由て、井戸から清水を汲んで、水器とコップとを持って参りました。婦人は枕を上げて、水器を引寄せて心ゆくばかりに水をのみました。嗚呼甘かつたと云ふて、や

がて眠りに落りました。翌朝になつて、枕許を見ると、昨夜の水器が盆に載つて居る。然るに其水器の端に、蛇の皮が少しばかり着いて居りました。蛇と申しても、我國の蛇とは種類が違ひまして、響尾蛇ラットレスチカと申して、尾の尖をビチ／＼鳴らす蛇じやそうであります。米國の西部には、澤山居ると云ふ事である。婦人は其蛇の皮を一見するや否や、さあ仕まつた、嗚呼なさけない事をしたと、一念思ふや否や、俄かに腹部に異狀を覺えて、蛇が動くやうに感ずる。そこで急に醫師を招いて、其治療を求めましたが、醫師が申すには、いかに夜中に水を飲めばとて、若し實地に蛇を呑むならば、必らず其時に分るもので、あれほどの物を、知らずに呑むと云ふ道理はない。それは唯水器に附いて居る皮を見て、

呑んだに違ひないと思ふたので、實地は、呑んで居らぬから、安心なさるがよいと云ふ。それでも腹の中で、現に此やうに動くではありませぬかと云て、婦人は非常に悶々苦しむ。醫師も、此上は是非に及ばぬとて、然らば貴女の仰せに従ひ、治療を致しませうと云て、其婦人に麻醉劑をかけて、昏睡状態になし置き、一方にては、豫め他から一疋の蛇を捕へ來つて、いかにも腹部を切開して出したやうに、血をぬりつけて置きました。治療と云ても、ほんの形ばかりの治療で、上皮の處を薄く切て、其處にちやんと繃帯を施しました。やがて婦人が麻醉から醒めますと、醫師が申すには、私の見方が間違つて居りました、やはり貴女の仰しやる通りに、蛇が入て居りました。此通りであります、そら御覽下さ

いご、已前の蛇を見せると、婦人は非常に喜んで、これで腹部もすつかり直りましたと云ふて、其より以後、精神も身體も、共に健康に腹したと申すことであります。

三。精神の持ち方は、これ程大切なものであります。私共が、我身が不幸不運であると思ふたらば、先づ心靜かに、古への聖賢の跡を尋ねて、今日の我身と、古への聖賢と、其生活状態に於て孰れが樂、孰れが苦であるかを省りみねばならぬ。ソクラテスは草履も穿かずに、多く徒跣で歩行し、夏冬を通して、一樣の衣物であつたと云ふ。孔子は、諸國へ巡回する間に、毎度食物が無くなつたと云ふ。親鸞聖人は、罪なきに配處の月を眺めて、關東北國の風雪の中に、二十五年の星霜を閲せられた。蓮如上人は、諸

國御巡化の間に、草鞋のひもが足にくひこんで、御往生の際までも、其傷痕が存して居たと云ふ。私共は、いかに貧困に暮しても穿くべき草履はある、食物は、兎も角も續けて居る。家もあれば衣服もある、一通りの衣食住は整ふて居る。それにも拘らず、不運である不幸である、人世があぢきないと云ふのは、人世の罪と云ふよりも、我心の罪と云はねばならぬ。不幸であると思ふ其心が、即ち不幸の基である。不運であると思ふ其精神が、即ち不運の基である。若し我身の上を省みたならば、自分の今日までの行為として、さほど幸福を受くべき徳も積んで居らぬ、徳を積んで居らぬ位ではない、一たび罪惡の方面に眼を轉して見れば、我身ながら震ひおのゝく程である。それも今日に始まつた事ではな

い、永の迷ひの間、同じ生活を繰返して、罪惡の途を進んで来たものちやと聞けば、我身の今日の生活が不運所ではない、已に餘り過ぎた程の幸福である。然るに此惡人を、大悲の如來は棄て給はず、常に慈悲の御手を垂れて、私共を憐んで下される。此世に於て、如來の御手より衣食住を賜はり、未來は地獄の苦惱を免がれて、安養の淨土に導かんとの誓願を起させられてある。一たび此御慈悲に氣づかせて貰へば、唯感謝の外はない、此御恩を知らずして、不運不幸と云ひ續けて来た我身の罪を懺悔するより外はない。

四。此頃、母親の亡なられたを因縁として、佛法に入られた一信者の懺悔談を聞きました。實に難有い。此御方は、今現に或

都會の、高等小學の校長を勤めて御座る御方である。其御話によりますと、自分が平素思ふに、餘所の學校の小使は、非常によく勤勉するが、自分の學校の小使のみが、どうも能く働かぬやうに見ゆる。それが眼について以來、何とも云へぬ不愉快の感が起つたと云ふ事である。やはり雨後の虹の影を望むやうに、遠方のものが美麗に見えて、自分の近くの者が、汚なく見ゆるのである。然るに昨年母上に死別れて、其佛事を營むのが縁となり、如來の御慈悲に氣づかせて貰ふたれば、他人の身の上を彼是云ふよりも自分が今日まで、道德も行へず、母の教訓も守られないのに、世間は寛大に我を容れて、學校の校長を多年勤めさせて呉れて居る自分が道德が行へぬのに、却て學生に道德を勸むると云ふやうな

矛盾な行ひをして居る者を、如來は毫しも棄て玉はず、一人兒の如く哀んで下される。未來は必らず惡趣にこそ沈むべき身を、往生の一大事は我れにまかせよと呼んで下される。世間は寛大にも此身を先生先生と呼んで居る、何たる幸福な身であるかと、一たび此點に氣づかせて貰ふたれば、天地の光景が、今までは全く變化して來た、今までは、學校の小使が勤勉せぬやうに思ふて居たが、よく／＼思ひ廻らせば、自分は朝八時までに出勤するが、小使は六時頃から起き出で、ちやんと掃除をし、茶をわかして授業に差支へがないやうにしてある。自分は午後四時に退出しても、小使は尙居残りて、萬事の後片付をする。妻があり小供のある事は、自分も小使も同じ事である。月俸を比較すれば、小使の

得る所は、自分の十分の一位である。然るに今日まで、餘所の學校の小使だけが勤勉して、我學校の小使が、一向働かぬやうに思ふて、不平を懷いて居たのは、其實は小使の罪と云ふよりも、寧ろ我心の罪である。此上は潔よく、小使共に懺悔せんごて、一日小使の室に往て、右の次第を懺悔した所が、話の半ば頃から、小使一同涙を流して、それ程までも、我等の身の上を思ひやり下される校長殿の御心の程が忝けないごて、其翌日より、小使者が打揃ふて、平素よりも愉快げに、一層働らくやうに成たと申すことである。私は、其校長の御方から、右の御話を直接に承りました、我身の上は、少からぬ益を蒙むつたのみならず、如來の御慈悲の、限りなく濡し玉ふことに、不思議の思ひを起さずには居ら

れませぬ。トルストイ伯の所謂、「信仰は心の方向轉換なり」の一語は、確かに此校長の心の上に見ることが出来ます。つまる所人世の幸不幸は、精神上から定まるものであるから、信仰のない人が不幸で、信仰ある人の生活は感謝の生活である。凡夫である已上は、時々不平の浮雲は起つても、一たび他力の御慈悲に思ひ至れば、やがて感謝の光りが差しこんで来る。そこで信仰の経験ある人の眼から、世間一般の人を見渡した時、何人が一番幸福であるかと申せば、言ふまでもなく、如來の御慈悲を信じて居る人が、一番幸福なのである。蓮如上人の御化導は、此眞理を顯はして下されてある。

一。蓮如上人仰せられ候堺の日向屋は、三十

萬貫を持たれども、死にたるが佛にはなり候まじ、大和の了妙は、帷一つをもきかね候へども此度、佛になるべきよご、仰せられさふらふ由に候。

五。今の泉州堺は、古へ戦國時代に於ては、非常に繁華な土地で、徳川家康は、京都に上洛した時に、わざ／＼堺見物に行つたと云ふことである。當時は西國と上方との交通は、すべて堺の港に由つたもので、關原戦争の時にも、薩州の島津義弘が、其軍勢を引上げる時は、やはり堺から船に乗つたと聞て居ります。兎に角、非常な繁華であつたと思はれる。尙戦國時代から溯りて、室町時代、即ち蓮如上人の御時代に於て、既に此地の繁華を極めて

居たのである。今日では、大阪が繁華の中心となつて居れども、大阪繁盛の起原は、蓮如上人の大阪建立が始まりで、上人の御時代に、今の大阪は、一の在所であつたことは、大阪建立の御文に顯はれてある通りである、當時唯一の繁華な地下、世人に榮華を羨まれた堺の日向屋は、餘程の財産家であつた事が想像せられる。三十萬貫の金は、五百萬圓に當るとか申すことである。然るに蓮如上人は、他力信仰の上から、此財産家を評し玉ひて、いかに財産を積めばとて、浮世の榮華は、眞に一夜の夢である。嵐の前の花である。まことに死せん時は、かねて頼みおきつる妻子も財寶も、一として我身に相そふことあるべからず。されば死出の山路のする、三途の大河をば、唯ひとりこそ行きなんづれと、御



誠め下された如く、信仰なき人の財産は、幸福でなくて却て不幸である。浮世の財産があるがために、それに心を奪はれて、後生も願はず、我身の上に灑がれたる如來の御慈悲にも氣がつかず、唯一生を夢の中に送りて、未來は悪趣に沈むと云ふは、誠に哀れなことである。また、大和の國、高市郡、南八木村、金臺寺の祖先に、了妙と申す尼さんが有つたが、貧困なれども、非常な篤信な人で、常に如來の御慈悲を喜んで、感謝の日暮しをいたしたと申すことである。人と生れて、貧困に陥ると云ふは、大なる不幸である。しかし若し其人が、如來の御慈悲を信する人ならば、其不幸の中に在り乍ら、我身の幸福を喜び、來世は如來の淨土に往生して、佛果の悟りを開くと思へば、浮世の財産や、一時の榮華

には代へられぬ。蓮如上人が、此二人を比較して、大和の了妙に團扇を舉げて、かの尼は、やがては往生を遂げて、無上の妙果を得るぞよと、信心のなかる可らざること、人生の榮華の、恃むべからざること、御論しになつたものである。御言は、僅か二行に足らぬ程に短かいが、是は蓮如上人の肺肝から、ほろりと漏れた一時の感想であると思はれる。覺えず漏れた感想が、偽りなき上人の思想である。草鞋のひもが、御足にくひこむまでも、一言の不平不足も仰せられず、如來の御慈悲を勸むるのに、一生を抛ち玉ひし原因は、此所にあると思はれます。日向屋の榮華を羨やまずして、了妙の果報を喜び玉ひし御精神が、淨土眞宗を再興なされし基である。

六。如來の御慈悲を喜びし了妙は、必らず我身の不幸を歎かざりしなるべし。なか／＼に、我身の幸福を喜んで暮したに違ひない。不幸と思へばこそ人生は不幸なれ、不幸と思はざる以上は、何物も不幸の種とはならぬ。孟子の言に、熊の掌の肉も我の欲する所、魚の肉も我の欲する所、しかし兩方を得ることが出来ぬとすれば、我は熊の掌を取ると申して居ります。富貴は人の欲する所である、誰も嫌ひな人は一人もない。しかし人生の富貴と、後生の樂果と、二者一を選ぶとすれば、蓮如上人は、日向屋の三十萬貫を棄て、了妙の帷一枚を取ると仰せられるのである。かやうな所は、心靜かに念佛して、人生の有様や、富貴な人の身の上を眺めて、孰れが得、孰れが失かを、心の中に味ふべきことで、

あまり人の前に公言すべきものではない。たとひ公言しても、信仰のない人ならば、此味は分らんのである。「この春は、芳野の山の山守と、なりてこそ知れ花の心を」と云ふ風情で、我身が御慈悲を信じたら、我身の幸福を喜ぶべき事である。

第十二回 不思議とは凡夫の佛になること

一。人間は何事をして、實地と云ふことを離れてはなりません。まして信仰上の御話に於ては、實地を離れたものは、唯の空論となつて、聴く人も話をする人も、彼我ともに益を得ることは出来ぬ。暫しの間の御話であります、佛法の御話を聞く時は、此座が御暇乞であると思ひ、佛前の御扉の開かれたるに對しては

無始曠劫の初事ちやと思はねばなりません。私は先月、因縁あつて鹿兒島に参り、彼の國の人情風俗などを見聞して、深く感心いたしました事であります。薩摩の國では、明治維新の初めまでは、國主から眞宗の教法を禁せられておりましたので、容易に他力易行の御法を聞くことは出来ないのであります。然るに如來の御慈悲は、此禁制の中にも、絶えず救ひの光りを放つて、土室の中に佛壇を安置し、その中で御慈悲を聽聞して、戰國時代から今日まで終に他力本願の光りを、地の底で持ち續けたと云ふので、これだけ聞ても、實に末代の不思議であります。何故に眞宗を弘むることを禁せられたかと申すに、戰國時代に於て、豊臣秀吉公が、薩州征伐に向はれた時、豊臣氏の方は、地理が不案内であつた爲め

當時の本願寺門跡に頼み、彼國の眞宗信者を以て、道案内者として薩州に攻めこんだ。此事が原因と成て、其戰爭の後に、國主から堅く眞宗を禁せられたと申すことでもあります。他に原因があつたかも知れませんが、歴史に傳へられて居る話は、唯今話したやうなことであります。戰國當時は、何事も武力を以て指配した時代で、武力の前には、理非曲直がないのである。其一例を申せば織田信長が石山本願寺と戰ふて、最後の勝利を占むる事が出来なかつた爲めに、終に朝廷に奏請して、朝命を以て本願寺と和睦し石山城を去て、紀州鷲の森に遷らしめ、また突然と和睦を破つて鷲の森を不意撃にすると云ふやうな、無茶苦茶をした時代であるから、當時豊臣秀吉の武力を以て、本願寺に道案内を命じ、本願

寺も武力の前に餘儀なくせられて、終に道案内をすることを、彼國の信徒の者に命じたものと見ゆる。それが爲めに真宗の弘通を禁せられたと云へば、真宗の爲めには一蹉跌に違ひはないが、其禁制の中に在て、三百年間依然として、他力本願の光りを持続したと思へば、其御慈悲の力、信仰の方が、如何に偉大なものであるかが思ひやられます。今も尙ほ存命して居る老人の中には、土害の御化導を聴聞した人があります。當時の佛法聴聞は、實に命がけの聴聞で、夜の十二時を過ぎて、人の寢静まるのを待て、跣足で參詣したといふことである。それも官廳の人に發見せられるこゝ、直ちに捕縛せられ、重き罪に處せられると云ふので、偶ま發見せられた爲め、御本尊を奉じて、海路より長崎に逃れたとか、

或は拷問せられて、足の骨を折られたとか、或は山の中で報恩講を勤めたと云ふやうな御話は、今尙ほ存命せる老人方の直話である。然るに今や明治の聖代に成て、彼國の人々も、公然と如來の御慈悲を聴聞することが出来、膝を並べて御法話の席に列なり、涙を浮べて御慈悲を喜ぶ姿を見ては、私も三百年間の禁制の時代と思ひ合せて、深く今昔の感に咽んだ事であります。祖師聖人御臨終の御歌の、「我れなくと法はつきまじ和歌の浦、青草人のあらんかざりは」の思召が、薩摩の國に於て最も明かに發現せられたやうに存じます。是等の話を聞くにつけても、如來の御慈悲を聞くに云ふは、容易ならぬ因縁事ぢやと思ふて、今晚一席の御法筵をも、實直に終りたい事と思ひます。如何に如來の御慈悲が深遠

にましましても、如何に蓮如上人の御化導が御親切でも、それを遠方に眺めて居ては、何等の所詮もないこと、従つて後生の大事に安心することは出来ませぬ。

二。序でありますから、「御一代記聞書」の御話に移る前に、薩摩の風俗に就て、尙ほ一言致して置きますが、薩摩の國には、最も喜ぶべき風俗が三つあります。一には「傘焼」といふ事で、是は一年中家にたまつた古い傘を、五月の二十八日に、一處に集めて焼き棄てること云ふ儀式であります。何のために五月二十八日を選んで、斯かる奇妙な儀式を行ふかと申せば、人も知る如く、七百年以前、源の頼朝公が天下を掌握して、富士の裾野に狩をせられた時、五月二十八日の夜、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致が

父の讎を報せんため、降りしきる五月雨を冒し、箆笠を打棄て、敵の陣屋に乗りこみ、工藤左衛門祐経を討取た日である。此日を紀念して、何卒人の子たる者は、親に孝を盡すこと、曾我兄弟の如くありたいものちやこの希望からして、毎年五月二十八日に、古い傘を集めて焼くのであります。衣服の古い物や、書籍の古手は、随分役に立つものであります。傘の古物ばかりは、家に在ても仕方がない。其仕方がない物を利用して、親孝行の紀念に用ゐると云ふは、如何にも面白い考ねであります。二には、十二月十四日の「義士傳讀」である。是は毎年十二月十四日の晩に、青年子弟が一處に集つて、交代に義士傳を朗讀し、四十七士の忠義の面影を偲ぶのである。此儀式の趣意は、今更申すまでもなく、

人の臣たる者は、四十七士の如くありたいと云ふ希望から起つたのであります。城山續きの高地の一端に、光明寺と云ふ寺がありまして、其寺の背面には、西郷隆盛の墓があつて、桐野利秋、篠原國幹、村田新八、別府晋助、池上四郎、永山彌一郎、逸見十郎といふやうな、一騎當千の勇士が、南洲翁を中心にして、左右に並んで墓石が建て居ります。其近邊に並んで居る石碑を調べると明治十年、九月二十四日戦死、若くば切腹と題して、十五歳十六歳と云ふ青年の墳墓があります。私は此石碑を見た時は、實に意外の感に打たれ、無惨な事であるわいと思ひました。今尙ほ存命して居る西南役當時の老士に聴て見ると、十年の二月に、薩軍が鹿兒島を出發する時に、十四、十五、十六と云ふやうな、少年子

弟に對しては、南洲翁も從軍を制止せられて、思ひ止まるやうにと諭されたけれど、何れも皆聽き入れず、子も親も戰陣に越くことを喜んで、御國のために忠義を立てると云ふて出發したさうであります。今日から申せば、薩軍を指して賊ちやと申すけれども其當時に在ては、薩摩の青年子弟は、實際西郷隆盛が立て國政を調理せねば、外國の侮りを防ぎ、國威を伸張することが出来ぬと思ふて居たのであります。九月二十四日の戦死とあるのは、城山落城の日で、西郷隆盛以下、二百餘人の將士が、岩崎谷に於て戦死した日である。して見ると、二月の始め鹿兒島を出發して以來熊本城を圍み、田原坂に戦ひ、日向の國に轉じて、宮崎、延岡等の戦場を経て、可愛嶽山の重圍を切りぬけて、再び故郷の城山に

歸り、九月二十四日の決戦に至るまで、彼の十五六歳の青年が、南洲翁の旗下に屬して、腕の續かん限り戦つたものと見ゆる。私には是等の石碑の前で、一遍の讀經をして、其英魂を吊した時は、彼等の心事を思ひやり、一掬の涙の胸間にせまるを禁じ得なかつた。初めの間は、是等の青年子弟に、此の如き壯烈の心を起さしめたのは、偏へに南洲翁の徳望であると思ふて居ましたが、かの「傘焼」や「義士傳讀」の話を聞くに及んで、南洲翁の徳望已外、薩州の風教の大に與つて力ある事を知りました。今一つの儀式は、毎年九月十四日の晩に、島津兵庫頭義弘の神社に參詣する事である。義弘の祭られてある處は、鹿兒島の市中から三里ほど離れて居ると云ふことである。然るに鹿兒島市の青年子弟は、九月十四

日の晩は、身に甲冑を着け、三里の道を往復して、夜を籠めて參詣すると云ふことである。何故に九月十四日を選んだかと申せば慶長五年の九月十五日は、關ヶ原の合戦で、島津氏は、石田三成の軍に屬して居たので、三成軍が敗北になるや否や、島津氏は非常の困難を冒し、勝ち誇りたる徳川軍の前を退却して、泉州の堺港より船に乗り、薩摩に歸國した事である。しかし此退却をした時は、三成方の諸軍は、總潰れに成て居る時で、其中を義弘ひとり陣を整へて退却するので、徳川方の、伊井直政や本多平八郎があれを無事に退却させてなるものかと、すぐに追撃を始めたので義弘は直ちに銃手に命じ、猛烈に打ち立てた所が、直政が傷を受けて馬より落ちた爲め、僅かに追撃を免がれ、軍を整へて歸國す

ることが出来ました。此時の薩摩武士の苦辛は、實に容易ならぬものであつた。由て祖先の苦辛を忘れぬやうにご云ふので、今も尙ほ九月十四日、即ち關ヶ原決戦の前夜に、義弘公の神社に參詣すると云ふことである。凡て祖先の苦勞を忘れぬ家は、何時までも繁盛するが、これを忘れた家は、最早や滅亡に近づいて居るのである。是等の美風を聴くにつけても、御互に注意して、祖先の御恩を思ひ浮べて、奢侈に流れ易い我が心を制止したいものである。今晚のやうに、疊の上に坐り乍ら、如來の御慈悲を聴くにつけ、此教法を御弘め下さるために、祖師聖人や蓮如上人が、いかに御苦心遊ばしたかを察し奉つて、一席の御法話も、心を留めて聴聞したいものであります。今の薩摩の三つの美風の中で、九月

十四日の儀式は、鹿兒島の市中だけであるが、傘焼と義士傳讀とは、島津公の領分到る處に行はれて居るそうであります。

三。古人の語に、「身を立て、然る後に人の辛苦を知る」と云ふことがあります。私共が、何とも思はずに、平氣に暮して居れば祖先の御恩も、親の辛苦も分らずに、暖かく着、飽まで食ふて、それを以て當り前の事ちやと思ひますが、自分が世の中に立ち、家を經營し、妻子を養ひ、辛苦艱難を経て、家を起し身を立て、見れば、世間の成功した人が、いかほど苦心したかご云ふ事が察せられます。全體今の世は、學問も商業も、非常に盛んになつては居るが、其代りに、朝から晩まで、仕事のために追ひ廻はされ儲かるごか損をするごか云ふ事のみを考へて、我身を反省觀察す



ることが少ない、是は確かに今日の弊風である。いかに學問をしても、いかに佛法を聽聞しても、我身を反省せずに居ては、益を蒙むることが出来ませぬ。そこでソクラテスが、信仰の初めに、「爾自身を知れ」と云ふ事を教へたのであります。私共が、少し實直に反省するならば、我身の罪惡のほども知れ、自分の價値が分つて來るに違ひはない。我が身は今日まで、果して如何ほどの功德を積んで居るか、如何ほどの善根を爲し得たるが、今日暖かく着、飽まで食ふて居るが、此恩恵を受くべき徳を備へて居るか親の御恩をどれほど報じたか、如來聖人の御恩を、一日に幾回思ひ浮べるか、深夜枕に着た後、どんな事を考へて居るか、過去の事を追想して、自分ながら身震ひは起らぬか、生れて以來今日ま

での歴史が、凡て是れ暗黒を以て滿されて居るのに、何故今日の如く生活して、衣食に不足を感せず、疊の上に坐り乍ら、如來の大悲を聽聞して、安慰を得させて貰ふのであるが、是は自分の腕前で出來た事か、または如來の御慈悲、祖師聖人の御辛勞、蓮如上人の汗や油の御蔭ではないか、其御恩も感謝せずに、今日までうか／＼と暮しながら、惡趣にも沈まず、生命も失はずに居るは不思議の事であるとは思はぬか。若し不思議と思はれるならば、其不思議の本は何であるか、如來の御慈悲こそ、不思議の本體ではないか。古へ信濃の國に、姥棄山と云ふ山があつて、親が年寄りになると、邪魔になると云ふて、此山の奥に棄てたと申傳へて居る。或時二人の兄弟が、年寄つた親を棄てんとて、前後から親

を荷ひながら、此山の奥へ進み行かれた。其時親は、荷はれながらも、道々に木の枝を折て差しこんで往た。さて山の奥について二人の子供が申すには、御父さん。今から御別れ致します。然かし今日道すがら、木の枝を折て差したのは何のためでありますかと尋ねたら、其親の申すには、何卒其方たちが、返り道に迷はぬやう、谷間に迷ひこんで、虎狼の餌食にならぬやう、無事に我が村里に還へるやうにと思ふて、道しるべのために、木の枝を差し置いてと申された。此處に二人の兄弟は驚いて、さては親の御慈悲は、これほど尊いものであるかと、親の前に謝り入て、再び親を荷ふて村里に歸り、終に孝行人に成たと申すことである。「みちくは、しほりくは誰がためぞ、我が身を棄て、歸る子

のため」とは、即ち古人が、此親の心をよんだものである。是れほど不思議な、親の御慈悲があればこそ、親不孝な子までが、無事に慈悲の懷に暖められるのである。此御慈悲がなくて、なんで不孝な子が、一日の生命を保つことが出来ませうか。如來の御慈悲がましませばこそ、十悪五逆の悪人、特に障りの多い女人が、今日まで悪趣にも沈まず、無事に命をなからへて、如來の御慈悲に氣づかせて貰ふたのである。一度び此事を思ひ浮ぶれば、如來の御慈悲の不思議なると共に、我が今日の生活が偏へに不思議である。今日の生活が不思議であると共に、未來後生の一大事を、如來の御手に救はれて、臨終一念の夕に、淨土往生を遂げると云ふが不思議である。されば和讃の中に、「いつの不思議をこくな

かに、佛法不思議にしくぞなき、佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり」と仰せられたは、即ち此事である。世の中に何か不思議といふても、悪い兒ほど不惑であるといふ親の御慈悲ほど不思議なものはない。然かし人間の慈悲は、時に動くことがある。如來の御慈悲は、山河大地は崩れても、動くこと云ふことは斷じてない。されば不思議中の不思議は彌陀の御慈悲である。何故に不思議であるか、信するほどの者は、悪人も女人も、皆悉く淨土に往生して、無上涅槃の御證りを開くからである。蓮如上人の御化導は、此意味合をよく顯はして下さつてある。是から「御一代記聞書」の文を讀み上げます。

一。法敬坊、蓮如上人へ申され候。あそはされ

候御名號、やけ申候が、六體の佛になり申候。不思議なる事と申され候へば、前々住上人その時仰せられ候。それは不思議にてもなきなり。佛の佛になり候は、不思議にてもなく候。惡凡夫の、彌陀をたのむ一念にて、佛になるこそ、不思議よと仰せられ候なり。

四。法敬坊は前にも申した通り、順誓と云ふ御弟子のことで、一生涯蓮如上人に御給侍申した人であるから、上人の實歴談は、此の法敬坊順誓に由て傳へられた事が澤山あります。今此御話の如きも、即ち其一例である。この法敬坊が、蓮如上人御直筆の、六字の名號を所持いたして居たのである。然るに或時思ひがけな

き火事に出遇ふて、その御名號を取り出す暇もなく、終に一片の灰燼と成て仕舞ひました。法敬坊は深く之を惜み、且つは恐れ入つて、此上は、せめて焼け跡の灰なりと取り集めんと、棒の先を以て、灰の中をかき回はすと、忽然として六體の佛が立ち現はれ空中に消れ去つたと申すことである。これはと驚き、法敬坊は蓮如上人の御前に馳せ付けて、唯今かやう／＼な事が起りました、實に不思議の事でありますと申し上げたれば、蓮如上人の御答にそれは不思議ではない、元と南無阿彌陀佛の六字は、佛の御慈悲の固まりである、佛の心の全體が、南無阿彌陀佛の中に籠められてある。されば佛體と名號とは、離すことの出来ぬものである。其六字の名號が、六體の佛身に成て現はれたと云ふは、別に不思議

議でも何でもない、當り前である。然かし乍ら、十惡五逆の惡人五障三從の女人が、彌陀をたのむ一念に、淨土往生の約束が結ばれて、臨終一念の夕に、光明放つ佛になるのが、まことの不思議であるぞよと仰せられたものである。唯今の文の中に、前々住上人ごあるは、蓮如上人の事であります。前にも申す通り、蓮如上人の御代續が實如上人で、其次が證如上人の御住職である。然るにこの法敬坊と蓮如上人との間の物語を、證如上人の時代に書き留めたものであるから、實如上人は前住上人に當り、蓮如上人は前々住上人に當るのである。

五。彌陀をたのむと申すことは、蓮如上人御一代に、最も心血を注がれた所である。法然上人は、念佛を申せと仰せられ、親鸞

聖人は佛の慈悲を信せよと仰せられる。然るに蓮如上人に至つて其信する味ひを、一層細かに、一層明かに御示しになつて、彌陀をたのむと仰せられたのである。私は嘗て、病床の女に對して、如來の御慈悲を話した事があります。其時、我等は唯如來の御慈悲を信するばかりちやと、繰返し／＼話しましたれば、其女は問ひ返して、信すると云ふことは、どう云ふ事でもありますかと申しました。此に至つて私は、蓮如上人の、彌陀をたのむこの御化導の、全く實驗上より起つた事である事を悟りました。故に此の「御一代記聞書」の中にも、やはり法敬坊を御相手としての御物語に、「佛法をばさしよせて云へ、信心安心と云へば、愚痴のものは、またも知らぬなり。信心安心など云へば、別のやうにも思ふなり

唯凡夫の佛になることを教ふべし、後生たすけ玉へと彌陀をたのめと云ふべし。何たる愚痴の衆生なりとも、聞て信をどるべし」と仰せられてある。信すると云ふ事は分らずとも、たのむと云ふ事の分らぬ人は恐らく無い。なせならば、たのむと云ふ言は、私共が毎日使ふて居るからである。愚かな人の知り居る語を取て、彌陀を信するとは、其たのむ味ひちやぞよと仰せられた所が、蓮如上人の御一生涯の御手柄で、また最も御苦心下された所である。私共は、財産をたのみにする、然るに其財産が甚だ不安な物である。また私共は妻子をたのみにする、然るに妻子も病に罹り、我身に先だち、これも永久のたのみにならぬ。三界は猶ほし火宅の如しで、一つも安心を與へて呉れるものはない。然るに此に廣大

無限の御慈悲がましまして、私共を呼んで下される。爾若し人世に懼れを抱くならば、人世のものを當にするな、水の泡の如きものをたのみにするな、人世の財産は、たとひ山ほど積むとも、やがて棄て去るべきものぞ、妻子はいかに不惑に思ふとも、遠からず別れ去るべきものぞ、爾此世を去らんと欲する時、家も従はず、財も従はず、兄弟親族一として従ふものはない。此時身に従ふものは、かねて積みかさねたる罪惡なり。爾はいかにもかくとも、一たび造りたる罪惡の網を遁れ出る能はず。然るに我れ早くより此有様を知り、爾等衆生の罪惡に泣き、未來後生は惡趣に沈むべき身にして、自から我身を救ふの術なきを知れり。故に我れ爾等衆生に代りて、善根も爲したり、功德も爲したり。瞋恚も制めた

り、愚痴も制めたり、眞實の心も養ひたり、清淨の心も養ひたり。此に南無阿彌陀佛の名號を成就したり。たとひ千歳の暗室ありとも、其暗きに泣くなかれ、我れに六字名號の燈火あり。燈火一たび點すれば、千歳の暗室も一朝に晴れ去るべし。罪惡の薪を積んで、山の如くならんとも、更に歎くなかれ、我れに慈悲の靈火あり、靈火一たび點せんか、罪惡の薪は一朝にして焼け去るべし。さらば有爲轉變のものをたのますして、我れをたのめよ、我れに歸せよ、凡てを我れにまかせて、未來後生を安心せよ。我は爾のために、全責任を帯んで、必らず善きに謀らふべし。我れまさに爾を導いて、佛果菩提の道に至らしめ、惡趣の苦惱を免がれしむべし。此御呼び聲を聞く時、私共は、我が計ひを棄て、如來の

力をたのむ、すがる、歸する、よりかゝる、信ずる、疑ひなくま  
 かせる、信の一念とは是である、たのむ一念とは是である。「たの  
 むとは、聲も言もなかりけり、すがる思ひをたのむとはいふ」は  
 此意味である。嗚呼何たる廣大無邊の御慈悲であらうか、また何  
 たる不思議の力であらうか。私の如き罪惡の者が、如來の御慈悲  
 に乗託して、臨終一念の夕に、光明放つ佛になることは、唯不思議  
 と申す外はない。古人は芳野山の花を見て、「これはこれはとばかり  
 花の芳野山」と申されしと聞か、私共が如來の御慈悲を信じて  
 佛果に至ることに比べて見れば、芳野の花は物の數でもない。蓮  
 如上人の仰せられた如く、佛の佛に御なり候は不思議にてもなく  
 惡凡夫の彌陀をたのむ一念にて、佛になるこそ、不思議よこの御

思召は、實に今の私の身の上であるわいと。かやうに如來の御慈  
 悲をば、我身の上に實驗した時に、始めて蓮如上人の、法敬坊に  
 對しての御物語が、心の底から味はれる事である。

六。「御一代記聞書」の中で、初めの第一條と、この法敬坊に對  
 しての御物語を讀むに、實に蓮如上人の御人格が、手に取る如く  
 伺はれる。上人の御胸の中には、常に御慈悲の火焰が漲つて居て  
 物に觸るゝ毎に、すぐに燃わつて、人の肺腑の中に、信仰の光  
 を放つて下される。即ち第一條にては、新年の御禮に際し、道徳  
 に向つて、いくつになるかやと、御年を尋ね玉ふや否や、道徳念  
 佛申さるべし、年をとるにつけても、未來後生の問題を忘れては  
 ならぬ。無常迅速の世の中ちや程に、一日も早く佛智の不思議を

信じて、他力念佛の中に、安心の日暮しをせよと仰せられた。今また此一段を見るに、法敬坊の火事の報告に對し、常の人ならばそれは實に不思議の事ぢや、私も其焼跡の灰を見たいものぢやと直ちに立上る所であるのに、蓮如上人は更に驚き玉はず、「それは不思議ではない、悪凡夫が彌陀をたのむ一念に、淨土往生の定まる事こそ、眞の不思議ではないか」と、直ちに信仰問題に引つけて、一念機微の間にも、衆生濟度を忘れ玉はぬ御精神の程は、唯感佩いたす外はありませぬ。

### 第十三回 佛法は無我にて候ふ

一。今晚は佛敎の無我説に就て、蓮如上人の御遺訓を窺ひます

「引きよせて、結べば柴のいほりなり、ごくればもとの野原なりけり」とは、西行上人の御歌でありまして、無我の眞理を手近く教へて下されたものであります。草や樹木を寄せ集めて、柱を立て屋根を葺けば、此に一の柴の庵が出来ます。其草木を引きよせば、やはり元の野原となつて、柴の庵は痕跡もありません。私共が人間に生れて居る間は、いかにも自我があるやうに見えますが、一たび無常の風にさらはれて、鳥邊野の煙、あだし野の露と消れてしまふ時は、自我の影もなければ形もない。されば人間に於ては、本来自我はないもので、一時有るやうに見るのは、自我ではなくて假我である。即ち假りの我れであります。此眞理を知らぬ爲めに、苦惱に沈み、紛争が起るのであります。曰く、



我が権利を侵害した。曰く、我が名譽を損害した。我れを誹つた我れを侮つたと、かやうに自我を主張するから、世上の争ひも起り、胸中の苦悶も起ることあります。釋迦如來の説き玉ひた一代佛教ひろしと雖も、其要點をつまんで申せば、無我の眞理を教ふる外はないのです。

二。清澤先生の御話に、「阿含經」の中には、到る處に無常無我といふことを説てある。然かし無常の理を悟ることは左程困難でもないが、無我の理を悟る事は、なか／＼容易ならぬ事であること申されました。なせと申すに、春の花は、一夜の嵐に散て往く。青々とした夏の若葉は、秋風の前に影を失ふてしまふ。生れた者は死し、逢ふた者は別れる。美人は白髪を悲しみ、壯者は衰老を

歎する。何處を尋ねて見ても、常住に變らぬ者は一もない。日々眼前に見る事が、凡て有爲轉變の有様である。そこで無常の理を悟る事は、左程困難でもありませんが、無我の理に至つては、容易に悟ることが出来ません。現在自分が生きて居て、今明かに活動して居るのに、自我は無いものぢやと思へど云ふても、さう容易に悟られるものでない。然かし無我の理が分るまでは、決して苦惱を離れる事は出来ません。私が嘗て罪惡觀に沈んで、色々苦悶して居た時に、清澤先生に訴へて申すには、私は、他人が私の身に加ねた無禮は、いかやうにも明らめませう。然かし自分が侵した罪惡は、何とも明らめて見やうがありません、これが一番苦しくてなりませんと申しました。其時先生の御話に、其方は、運

如上人の、「佛法は無我にて候ふ」この御教訓は聞たことはないか  
 佛法の究極の眞理は無我観である。我が身の罪惡の重さに堪へぬ  
 と云ふ事も、自我ありと認められた時の事である。如來の御慈悲を信  
 じて、自我の全體を如來にまかせ奉つた時は、自我と云ふものは  
 既に無くなつて居る。自我が無ければ、自我の負ふべき罪もない  
 若し責任あらば、如來が皆引受て下される。故に他力の教へを信  
 する者は、自我の觀念を棄て、唯如來の御指導を信するのみで  
 ある。若し運如上人が今の世に生れ、今日の言語にて御話し下さ  
 るならば、「佛法は無我にて候ふ」と仰せられずに、「佛法は凡てを  
 如來にまかせ奉つて、自己は全く無責任にて候ふ」と仰せらるゝ  
 に違ひはないと申されました。此時の先生の御一言で、私の胸の

中に光りが指し、非常に心が軽くなつて、歡喜の泉が、滾々とし  
 て胸中に湧き出るを覺えました。

三。さて無我観といふことは、佛教通じての教へであるから、  
 自力教の上にも、他力教の上にも、何れにも其光りを見出すこと  
 が出来ますが、私共は、自力の觀念に由て、無我の境に進むこと  
 はとても望み難いことであります。そこで今他力教の上で、實地  
 に無我の眞理を味ふて行きたいと思ひます。いかにすれば無我に  
 なられるかと申すに、是れは如來に歸するより外はありません。  
 無我になるのが、如來に歸する目的ではなければ、如來の他力  
 に歸すれば、信心の餘徳として、自から無我の徳が顯はれるので  
 あります。小兒が庭前で遊んで居る處に、一疋の小犬が現はれる

小兒は其恐ろしさに、聲をあげて母親を呼んで泣く、母親が其泣聲を聞きつけて、奥の一室から飛んで出で、小兒を両手で抱き上げる。今まで犬を恐れて泣いた兒は、今は母の胸に抱われ乍ら、菓子的一片をなげて、小犬を呼んで戯れて居る。小兒は元より、無我になる積りで母を呼んだのではない。然かし母の腕に抱われて見ると、いつの間にか自我を忘れて、ちやんと無我になつて居る。無我になつた證據には、今まで恐ろしかつた犬が、少しも恐ろしくなくて、菓子の一片をなげ與へて居るではないか。私共が人生の庭の前に遊んで居る。そこに煩惱の犬が忽然として現はれる。犬の姿に氣がつかぬ先こそ平然と遊んで居れ、一たび氣がついて見れば、母を呼ばずば居られぬ。自己の罪惡が分らぬ間は

ごかく人生はこんなものぢや位に思ふて居るが、一たび我が身の罪惡に氣づいて見れば、我れながら我が罪惡に慄かすには居られぬ。我から進んでも、如來の親を呼びたい處に、如來の方から先手をかけて、煩惱の犬が恐ろしくば我が手にすがれ、我れ必らず爾を保護すべし、爾の身に罪あらば、我れまさに責任を負ふべしと呼んで下される。此呼聲を聞く時、私共はどうして母親の手に飛びつかずに居られようか。彌陀をたのむ味は此處である。一たび親の両手に懷かれた時は、自分から無我になる積りではなければ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、母の御名を呼ぶたびに、いつの間にか親の御慈悲に引つけられて、我身は已に無我に成て居る。無我に成た證據には、今まで恐ろしく見わた煩惱の犬が、

更に恐ろしく無くなつて、煩惱を相手にして、喜びながら日暮しをさせて貰ふではないか。親戀聖人が仰せらるゝ所の、「よろこぶべき心をおさへて喜ばせざるは煩惱の所爲也。しかるに佛かねて知ろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりぞ知られて、いよくたのもしく覺ゆる」この御喜びは、即ち聖人が、如來の御手に懷かれて、小犬を相手に喜び遊ぶ姿ではありませぬか。

四。私共の日々の日暮しを調べて見れば、我慢我情の生活ばかりで、誠に御慚かしい次第であります。然かし乍ら如來の御慈悲に立かへり、念佛させて貰ふ時は、いつの間にやら我慢の角が折れ、かくの如き悪人を、本としてたすけ玉ふ御慈悲の有難さよこ

感謝の思ひに住する事が出来る。いかに村雲が懸つて居ても、一たび風に吹かるれば、雲の立場を失ふて、終には其影だも留めぬやうになります。いかに妄念の村雲が集りて、私共の胸を苦しめて居ても、一たび如來の御慈悲に立返つて、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、親の御名を唱ふれば、我が身が現在、親の御手に懷かれて居る事に気がついて、罪も障りも苦痛にならず、唯大悲の御恩の深重たる事を感謝するやうになります。自分では別に無我の境を求むる積りではなくても、ひとりでに無我の境に住するのであります、これが他方である、自然の大道であります。私は昔て秋の天氣の晴れ渡つた日に、紅葉の景を賞するため、東山の南方、今熊野の觀音に參詣しました所が、庭の紅葉は霜に飽いて

美しき色を夕陽の前に浮べて居る。面白い景色であるわいと、紅葉の色を賞し乍ら、不圖本堂の方を振り向くと、一人の婦人が、観音の前に脆づいて、聲朗かに御詠歌を唱へて居る。その婦人の姿が、いかにも殊勝に、我れを忘れて観音の靈力に引つけられて居る。私は其時、信心の人の尊い所は、即ち此處にある事ぢやと思ひました。若し其婦人の心の中を調べたならば、罪も障りも山ほどあるでありませう、然かし今や観音の御慈悲の前に、凡ての苦惱を打忘れ、凡夫としての女人の心を超脱して、今や観音の御慈悲に一致して居るのである。そこが尊く見ゆる原因であります。古への歌に、「唱ふれば、われもほごけちなかりけり、南無阿彌陀佛の聲のみぞして」と申すのがあります。今其作者の名は確

かに記憶して居ませんが、大徳のよまれた事だけは確かであります。かの観音堂の婦人が、私の眼に尊く見わたといふのは、私が見やうの如何に由たのではない、一心に観音を念じて、御詠歌を唱へて居る時は、其女と観音とが一致して居るので、「唱ふれば我れも佛もなかりけり」とは即ち此事である。かの婦人と観音とは、其體は別々になつて居ても、其精神は今まさに合體して居るのである。無我になる積りではなくても、他力不思議、自然の道理に由て、自から無我の境に入るのであります。

五。然るに世の中には、この信仰上の難有い御謂れを知らずして、唯観音に参詣すれば、美人になる事ぢやと心得て、清水の観音に参詣する婦人が多いと聞きますが、是れは大いなる誤りであ

ります。其心が観音と一致するやうになつてこそ、其顔や姿が殊勝に見ゆるものなれ、信心もなく無我の境にも住せずして、たい観音に参つたさて、決して美人に成り得らるゝものではない。往昔、印度のベナレスと申す國に、一人の國王がありまして、非常に鹿の肉を好ませられた。此國の都近くに、鹿野苑と申す公園があつて、日本で申せば奈良の公園を見たやうな處で、澤山な鹿が住んで居ます。國王は日々狩人を遣はして、鹿を殺して晚餐の御膳に上せて居りました。然るに一二疋の鹿を殺すために、多くの鹿が矢傷を受けたり、槍で突かれたりするので、鹿の方では非常に困つて居りました。或時鹿が會議を開いて相談するには、我々は此ベナレス國に住んで居る以上は、國王の命令に従ふべきは當

然である。故に王が我々の肉を喰へると云ふなら、我等は此身を差上げる事を辭退することは出来ぬ。然かし王の晚餐の膳に上る肉は、唯僅かに一皿である。されば一疋の鹿を殺せば、晚餐の資としては餘る程である。然るに毎日多くの鹿が追廻はされ、矢傷や槍傷を負はされては、一日も平和に暮すことが出来ぬ。此上は國王に歎願して、一日一疋の鹿を殺す事にして、我々の方から、抽籤に由て殺される順番を定めたい、さすれば順番以外の者は、安心して其日を送ることが出来る譯ではないか。終に總代を以て此事を願ひ出ました處が、國王も深く感じて、願ひの趣き尤なりさて、即日御許しになりました。これから後は、抽籤の順に由て殺されるのであるから、どの鹿も不平を云ふ者はない。順番に

當つた者が、平氣に殺される。順番外の者は、鹿野苑の公園で、青草の上を飛び廻つて遊ぶと云ふ風情で、國王の方も鹿の方も、雙方少からぬ便宜を得ました。然るに或日の事、一疋の牝鹿が順番に當つたので、頻りにさめ／＼と泣て居る。ほかの鹿共は之を怪んで、順番であるのに、何を其やうに泣くかと尋ねますと、其鹿の申すには、私は已に老先短かい身であるから、此身を殺される事は更に遺憾と思ひませぬ。然かし今私の腹の中に、三疋の兒鹿が宿つて居る。若し私か殺された時は、東も西も知らぬ兒鹿は暗から暗へ葬られて仕まひます、唯是ればかりが殘念でと、言ひさしてはまた泣き入ります。是れは氣の毒な事であること、ほかの鹿共も同情の感に打たれて居ましたが、其時鹿の王が出て來て申

すには、委細の様子は陰にて聞たが、如何にも其方は不便なものである。我れは今澤山な鹿の中で、王とあがめられて居るけれど、我れとても順番に漏れる事は出來ぬ。籤に當つた日には、やはり國王の御膳に上らねばならぬ。さらば今日其方に代つて殺されに、行くから、其方は後に殘つて、腹の兒鹿を生み落した後に心置きなく殺されに行くが宜からうと申したので、今の牝鹿は非常に喜び、其親切を厚く感謝して、後に殘ることになりました。然るに彼の鹿の王は、國王の御殿に殺されに行きましたが、臣下の者が其鹿の顔色を見るに、金色の光りを放ちて、其尊さが何とも云へぬほどである。これは唯事ではあるまひと、右の次第を國王に奏上いたしますと、國王も不審に思ふて、庭先に其鹿を呼び

出して御覽になると、いかにも金色の光りを放ちて、其威嚴の尊  
 いこと驚くばかりである。由て國王は其鹿に向ひ、其方が今日順  
 番に當つて来たには、何ぞ深い譯がありはせぬかとの御尋ねであ  
 る。鹿は委細の様子を言上に及ぶと、國王は深く感じ入り、畜生  
 でさへも、互ひに憐みをかけ、友達のために命を代つてやるのに  
 我れは人間に生れ乍ら、物の命を取る事を何とも思はずに、膳部  
 の用に具へて居るとは、我れながら慚愧の次第であると仰せられ  
 て、其日より、鹿を殺すことを禁せられたと申すことであります  
 今の鹿が、其顔より金色の光りを放つたと云ふのは、心の中の慈  
 悲の光りが、其顔に顯はれたものと見えます、然かれば、観音に  
 參つたごと、美人になると云ふ譯はなけれども、観音を信じて、

かの佛の如く慈悲心を起すならば、其顔色も必らず威嚴を生ずる  
 に違ひはない。されば私が今熊野の観音堂に於て、一心に御詠歌  
 を唱へて、観音と一致になり、無我の境に入て居る婦人を見て、  
 何となく尊く感じたこと云ふのは、私の見やうに由つたのではなく  
 て、實際其時は、婦人の信心が其姿に顯はれて居たものと見ま  
 す。

六。此道理から推して見ると、親鸞聖人が、常陸の國稻田の草  
 庵に於て、山伏の辨圓に御面會になつた時に、其御顔から光明を  
 放つた爲め、さすがの辨圓も我慢の角が折れ、終に聖人の御弟子  
 に成たと申すことは、敢て不思議と申すことではない、寧ろ當り前  
 の事でありませう。辨圓は自分の職業の邪魔になるから、親鸞聖人



を害したてまつらんとしたが、聖人は何の氣もなく、唯我れに遇ひたいと云ふ人ならば、何れ如來の御慈悲に因縁ある人であらうと思召して、念佛申し乍ら御出ましになつたのである。然かし其胸中の慈悲心が、御顔の上に顯はれて、金色の光明を放つた爲め辨圓の害心も忽ち消滅したのであります。此時の光明放つた聖人の御姿が、御繪像となつて、今も尙ほ稻田の草庵に残つて居ること聞きました。されば私共は、自分の力では無我の境に入ることは出来ねども、他力の御慈悲に歸入して、念佛の日暮しをさせて貰へば、自から求めんでも、自然に無我の境に入ることが出来ます。無我の境に入れば、先に御話しいたした、母親に懷かれて小犬を見て居る小兒のやうに、苦痛多き人生を、平和に暮すことが出

來るのであります。然かし是れが唯一片の話に終つては甚だ残念である。私共の日常の生活に於て、實地に此無我の境を見出して行きたいものであります。清澤先生が嘗て、「我れ如來を念すれば世に處するの道開け、我れ如來を忘るれば、世に處するの道閉づ」ご申されましたが、實に先生の面目を、今眼前に見るやうにあります。清澤先生は、道徳觀念の強く、義務の思想に強い御方でありましたから、まじめに御自身の上を顧みた時には、百遍切腹しても、まだ義務の負債を償ふことが出来ぬと感せられるのであります。然るに一たび如來の御慈悲に立返つた時には、如來の御慈悲は私一人のためである。私の義務の荷物は、如來が善きやうに計らふて下される、私の拭ふべき泥は、如來の御手で拭ふて下さ

れると、かやうに感じて来るから、先生の自我は如来の中に没入せられて、いつの間にか無私の生活になつて居られる。我れ如来を念すれば、世に處するの道開くとは即ち是事であります。されば私共は、自分の罪惡に氣づく時、義務の觀念に苦しめらるゝ時責任煩惱に追ひ廻はさるゝ時、身の不幸を歎き、過去の我身を責むるよりも、唯如来の御慈悲は、此の如き私のためちやと、御慈悲の方に立返りたいものであります。此故に、「歎異鈔」第十六節に、信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけてもいよく願力をあふぎまひらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱の心もいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生にはか

し。こき思ひを具せずして、たいほれ。彌陀の御恩の深重なること、つねに思ひいだしまひらすべし。しかれば念佛もまうされ候ふ、これ自然なり。わがはからはざるを自然とまうすなり、これすなはち他力にてまします。と御丁寧に御示し下されてあります。淺ましい心の起るにつけ、罪惡の影の見ゆるにつけ、たいほれ。彌陀の御恩の深重なることを喜べば、自然に念佛も申され、またやさしい心も起るものであります。是れが自然である他力である。私の方から求めてするのではなければ、自然に無我の境に引き入れられ、自然に歡喜の心を起させて貰うのであります。今から「御一代記開書」の本文を拜讀いたします。

一。佛法には無我と仰せられ候。われと思ふこ

ごは、いさゝかもあるまじきことなり。われは  
わるしごおもう人なし。これ聖人の御罰なりご  
御詞候ふ。他力の御すゝめにて候ふ。おめく  
われごいふことあるまじく候。無我ごいふこと  
前住上人も度々仰せられ候ふ。

七。初めに、佛法には無我ご仰せられ候ふことある處は、通佛教  
の事を申されたもので、小乗でも大乘でも、釋尊一代の御化導に  
は、通じて無我の眞理を教へ下されてあります。孔子は三百篇の  
詩を評して、「詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く思ひ邪しま無し」  
と申されましたが、詩經の中に載せられて居る三百篇の詩は、忠  
臣の心を詠じた者もあれば、貞婦の心を詠じた者もある、國家の

衰亡を歎いた者もあれば、父母の不徳を悲しんだ者もある。其詩  
は種々雑多であるけれど、詩人が詐らざる中心の情緒を歌ふた事  
だけは、三百篇皆通じて同じ事である。釋尊の説き玉ひし法門、  
八萬四千ご多岐なれども、其通じて教ふる所は、無我の眞理に外  
ならぬ。若し三百篇の詩が、思無邪の三字で評せらるゝならば、  
釋迦一代の法門は、無我の二字を以て評すべき性質のものであり  
ます。故に今違如上人が、佛教に通じたる無我の理を指して、佛  
法には無我ご仰せられ候ふと申したものである。聖道門自力の、  
自己の精神を磨く御宗旨でさへ、無我の大道を進むのであるから  
況んや自力を棄て、他力に歸し、凡夫の一身を擧て、如來海中に  
歸入する身は、我れご云ふ事を推し立つべき筈のものでない。念

佛行者の會合、信心の有無を沙汰するに當り、我れの信心は善い人の信心は悪い、我れの聞き得たる處が正義で、人の聞き得たる處は不正義ぢやと、他人をそしり、自我を主張すると云ふは、通佛敎の無我の敎へに背くのみならず、開山聖人の御門徒として、聖人の敎へに背く者である。「歎異鈔」の中にも、「專修念佛の行者の、我が弟子人の弟子といふ争論の候ふらんこと、以ての外仔細なり」と御誠めなされてあります。然るに我慢を主張し、自分の考ねが善くて、人の考ねが悪いやうに思ひ、我が身の罪惡深重なるにも氣づかず、凡夫の心の顛倒妄念なるにも氣づかず、猥りに信心談合の席などにて、我慢我見を主張する者は、開山聖人より擯斥せらるべき者、聖人より罰を蒙むるべき者である。故に蓮

如上人は明かに、われはわろしと思ふ人なし、これ聖人の御罰なりと御詞候ふと仰せられたものである。聖人より罰を被むることは如何なる事であるかと申せば、永き代開山聖人の御門徒たる資格を失ふことである。如來の御慈悲を信じ、無我的生活をする人ならば、たとひ身は何宗に生れて居ても、確かに聖人の御門徒である。眞實に如來の御慈悲を信せず、口さきばかり法門の事を覺わて、我れ物知り顔に振舞ふ者は、聖人より擯斥せらるべき者にて御罰を蒙むるべき者である。やはり此「御一代記聞書」の中の御話でありますが、蓮如上人は、信心のない人ど、親不孝の人には御面會を謝絶すると申されてあります。罪惡の深重なるは少しも妨げはなけれども、御慈悲を信せず、我慢を主張するは、開山

聖人も蓮如上人も、齊しく誠め玉ふ處であります。これ聖人の御罰なりと御詞候ふとある所の、あの御詞とは、蓮如上人の御詞を指したものである。この「御二代記聞書」の記述は、證如上人の時に出来たものであるから、凡て前々住上人とあるは、蓮如上人の御事にて、前住上人とは、實如上人の事である。されば念佛行者たるものは、無我の生活をいたさねばならぬと云ふことは、ひとり蓮如上人の御教訓のみでなく、御嫡子實如上人もたびく仰せられた事と見えます。故に最後の一段に、「無我といふこと、前住上人も度々仰せられ候ふ」と申したものであります。

八。通佛教の無我觀と、他力信仰の上の無我生活とは、大略今まで御話しいたした通りであります。今晚の御話の最後に、近

來名高い高僧の逸話を一つ御紹介いたして置きます。それは明治の高僧と云はれた、原坦山和尚の御話であります。或時坦山和尚が、一人の小僧を従がへ、道中をいたして居りましたが、折しも雨後の事とて、道のまん中に水溜りが出来て居りました。其處に一人の美人が佇んで、水を渡りかねて、困つて居る風情である。坦山師はこれを見るや否や、御困りならば、私が渡してあげませうと、其美人を両手で抱き上げて、向ふ側に渡してやりました。美人は厚く禮を述べて立去りましたが、坦山師も亦自分の目ざす方向に向つて歩み去りました。然るに御供を致して居る小僧が思ふには、我が師坦山和尚は、高德の御方と云はれ乍ら、美人を両手に抱き上げて水を渡すなどは、誠に面白からぬ事である。これは是

非ども詰問せねばならぬ。然かし乍ら更に思ひ廻らせば、師匠に對して、こんな事を詰問するは如何であらうか、已めにしようかまた尋ねて見ようかと、心の中に取つ置つし乍ら、一里ばかりの道を進んで、終に口を切て、かの美人の話を持出して、戒律を持つ者が、女を抱えて水を渡すなどは、如何なことでありませうと申した所が、坦山師は小僧を顧みて、「己れは水を渡し終つた時、既に美人を手離したしたが、其方はまだあの女を抱えて居のたか」と申したさうであります。いかにも高傳の無我の態度が見えて面白。坦山師は、美人を抱いて水を渡してはやつたれど、美人の事を更に心に留めて居らぬ。然るにかの小僧は、一里の道を行く間、唯美人の事のみ考わて居た。これが却て美人を抱て居る事に

なる。かやうな高僧の美德は、私共がたやすく學ぶことは出来ねども、過ぎ去つた事の、善いとか悪いとか、残念であるの、口惜しいのと云ふやうな事は、無我の光りの中に、凡て忘れて行きたいものであります。清澤先生の御話に、人間は、今現在の事で苦悶する場合もあるけれど、過去の事を追想して悶ゆる場合が頗ぶる多い、落第した後で、いつまでも残念に思ふよりも、落第の事は明らめて仕まうて、新らしく勉強する方が宜しい。他力信心の人は、凡ての事如來の導きなりと信するが故に、過去の事はさりと明らめて、現在の新生活の上に光りを見出し、奮勵努力すべきものであると申されました。何卒私共も、無我の中に獅子奮迅の勢を以て、學問にも世務にも、充分勉強いたしたい事でありま

す。今晚は是にて散會いたします。

### 第十四回 時節到来といふこと

一。運命といふことは、私共の日常生活に於て、恒に忘れてはならぬ事であります。富貴になるも運命、貧賤になるも運命、長生をするも夭折をするも、皆これ運命の然らしむる所である。富貴に生れては富貴の中に樂み、貧賤に生れては貧賤の中に樂み他人を羨まらず我身を歎かず、悠然と樂んで行くのが、運命の道理を達觀した人であります。然かし乍ら、この運命といふ事を聞き誤つて、仕事もせず養生もせず、惰けた生活をしながら、貧乏も因縁である、病氣も因縁である、學問の出来んのも借金殖へる

のも、皆是れ運命であるから致方がないと云て、自分勝手に誤つた運命觀を作つて、一生涯を悲觀の中に終る人がある、誠に注意すべき事でありませぬ。勉強をした上の落第、養生をした上の病氣こそ、眞の運命と申すべきものであれ、勉強もせず養生もせず落第や病氣に陥つて、自分は誠に不幸な運命を持って居ると云ふのは、實に誤つた運命觀と申さねばならぬ。

二。大典上人と申す高僧は、幼少の時に、非常な弱體で、御飯をすら食へることが出来ず、僅かに御粥で命をつないで居たが、或時、人相家に視て貰つた所が、貴僧はよく長らへた所で、三十歳までの壽命である、況んや學問勉強などは、思ひもよらぬ事である、其體で學問をしたならば、生命も學問も、兩ながら得る所はなく

て、損害を受けねばならぬと申されました。是より大典上人は、身の養生を大切にし、一日に僅か一時間ばかりの學問をして居ましたが、漸次に身體も壯健になり、學問も進みまして、八十餘歳まで生存らへ、終に佛敎界に於て、一代の大學者となりました。上人が晩年に及んで申されるには、「人間は一日に一時間、眞に心をこめて勉強すれば、必らず學者として成功するものぢや」と云はれたさうであります。實に私共の味ふべき敎訓であります。若しも大典上人が、人相家の説に誤られて、自分は實に不幸である弱體に生れたのは、これまでの運命であるから仕方がない、最早や學問も勉強も望みが絶れたと、悲觀に沈んで仕まつたら、或は人相家の云ふ通りに、學問も出來ずに、三十歳以前に死んだか

も知れぬ。然かし乍ら、凡て物事は、出來るか出來ぬか、實行して見ねば分らぬものである。實行した上に成功せぬならば、それこそ眞の運命である。實行もせず勉強もせず、たゞ運命である因縁であると言ふのは、精神弱き人の逃げ口上に過ぎないのである。嘗て清澤先生が、因縁といふ事に就て、御意見を述べられて去年の仕事は今年の因縁となる。昨日の勉強は、今日の因縁となる。今日善事をしたことは、また明日の因縁となる。そこで因縁の道理を心得た人は、一日も惰ける譯に行かん。然るに何事も因縁である運命であると申して、勉強もせず養生もせず、人生を流れ渡りに行かうとするのは、因縁説の心得誤まりであると申された事があります。



三。先月の御話は、蓮如上人の御遺訓に基づいて、佛教の無我観、他方信仰の人の無我生活を御話し致しましたが、今晚はやはり蓮如上人の御遺訓に基づいて、佛教の運命觀を御話しいたす積りであります。然かし佛教の運命觀と申せば、何か佛教の上に取切た御話で、世間日常の生活と相離れたものぢやと思ふならば、大いなる誤まりであります。其事は「御一代記開書」の本文に就て御話し致す事として、只今、人生の運命と云ふ事について、尙少しく話して置たい事があります。それは外でもない、英國の有名な美術家フラキシマンの御話であります。

四。フラキシマンは、英國倫敦の、小さな人形屋の息子であります。それも至つて貧乏な店で、父は日々人形を作るけれども、一家の生活を支へかねる有様でありました。其上尙ほ一つの不幸な事は、この息男のフラキシマンが、幼少より弱體にして、思ふやうに歩行すら出来ぬことであります。然るにフラキシマンは、子供ながらも、父の仕事を助けんと、白土をこねて人形を作りましたが、此勞働が、非常に健康をたすけて、血液の循環も良好になり、終には杖に倚て歩行する事が出来るやうになりました。特に最も面白い事は、此少年時代に作った人形は、作り方は粗末であるけれども、後世に名を揚げた偉人の、少年時代の作と云ふので、却て英國の人士に重んぜられて居るといふ事があります。君は十五歳にして美術學校に入りましたが、熱心な勉強家であつたから、間もなく諸生の中に在て、嶄然として頭角を露はしました

即ち學校に入學いたした年に、一の肖像を作つて、銀の賞牌を授與せられました。次の年に金の賞牌を得べき者は、必らずフラシキマンならんとは、當時學校中の評判でありましたが、これは不幸にして、他の生徒の手に落ちました。然るに君は、此失敗に由て、いよく精神を振起し、其父に向つて、「父よ今暫く待ち玉へ兒はやがて學校の光榮となるべき肖像を作らん」と申しました。

五。フラキシマンは、二十七歳にして妻を迎へました、妻の名はアンデンマンと申して、非常な賢婦でありました。美術や詩畫を理解するの才があつて、フラキシマンの妻としては、誠に理想に適した女でありました。然るに結婚後あまり日も立たぬ中に、フラキシマンは街の中を歩いて居りましたが、美術學校の教授の

レイノルドといふ御方に遇ひました。此先生が申すには、君は近頃結婚したと云ふが、それは眞正であるかこの御尋ねである。如何にも眞正でありますと答へた所が、先生の申すには、それは誠に残念な事をした、あたら美術の一天才を失ふた、最早や君の美術は末の見こみが無い。凡て美術工藝に於て、絶妙の地位に至らんとするならば、朝は鶏の聲を聞いて起き、夜は寢床につくまで、専心一意に勉強せねばならぬ。また伊太利の羅馬には、古來からの名高い彫刻や肖像があるので、眞に美術の大家に成るには、是非とも萬里の波濤を越へて、羅馬に研究に行かねばならぬ。然るに今日妻を娶つては、是より以後人生の生活に追はれ、専心一意勉強することは出来ぬ。況んや羅馬に留學するなどは思ひも寄ら

ぬ事である。予は此歳に及ぶまで、今に妻を迎へて居らぬ、今日以後こそ、一生涯妻を迎へぬ積りである。それは申すまでもなく、専心一意美術を研究する目的があるからである。君は實に美術の天才で、予は非常に君の前途に望みを屬して居たが、已に妻を娶つた已上は、千遍云ふても返らぬ事、あたら美術の天才を失ひましたと申された。

六。この道理ある言を聞くや否や、フラキシマンは直さま我家に馳せ還つて、妻の手を取るや否や、汝は我が事業を敗りたりと云て落膽の色を露はしました。妻は何事の起つたかと驚いて、委細の様子を尋ねて見ると、誠に道理ある先生の御言である。然かし乍ら、妻を娶つた爲めに、美術の研究を怠り、羅馬の遊學をや

めるならば、先生の御言も道理ある事なれど、妻が夫をたすけて美術の研究を爲さしめ、共に萬里の海を渡り、羅馬の留學もいたすならば、一人の勉強よりも、二人相たすけての勉強の方が、却て都合のよい譯ではありませんか。美術學校の先生が、妻を持ては大美術家になられぬと申すなら、私と貴君と相たすけて、妻を持つても、確かに大美術家になれるといふ特例を開きませうかと申した所が、今まで沈みきつて居たフラキシマンも、此一言に勵まされて。然らば汝の言にまかすべしとて、再び元氣を振ひ起しました。

七。これより二人は、五年の間一生懸命に働いて、一錢と雖も浪りに費すことなく節約いたしました。が、學校や他人からの援助

を受ることなくて、夫妻の間にて、無事に旅費を儲け出し、終に英國を去て、ジブラルタルの海峡を越へ、遙かに地中海の波を渡りて、終に羅馬府に上陸いたしました。フラキシマンは日夜勉強して、古代の肖像を手本として彫刻を試み、其間に自己の意匠を加へて斬新なる者を作り、之を賣つて生活の費用として勉強を進めました。妻は傍に在て、炊事を營み夫を慰めて、多年の間留學を續けましたが、羅馬に居る間に、早くも其名聲は故國の倫敦に聞へました。フラキシマンがいよいよ大名を荷ふて故郷に還るや、肖像の彫刻を依頼する者門に集まり、其傑作相續いで世上に顯はれたれば、終に美術大學院の教授に聘せられました。かくて先きに美術研究のために、無妻主義を唱へたレイノルド先生は、さほ

ごの名聲も揚らぬのに、妻を娶つたフラキシマンは、終に英國第一流の美術家となりました。嘗て賤しき人形屋に生れ、病身の體を以て、枕に倚り乍ら、土人形を作つて居た少年は、今は大名を世上に馳せ、富貴の人となり。其晩年は極めて平穩にして、妻と共に詩畫や美術を樂んで居りましたか、妻が病死してより、非常に落膽し、それが爲に健康を害し、六十歳を一期として、一千八百二十六年、即ち我國の文政九年に此世を去りました。

八。先に御話しいたした、大典上人の成功と、フラキシマンの成功の跡を見れば、運命と云ふ事が大遍によく知れる。病身なのも運命、學問の出來んのも運命と云ふて、何もかも運命に片付て仕舞うて、努力勉強をせないのは、運命觀の心得誤りである。勉

強しても出来ず、働いても儲からぬと云ふならば、それこそ眞に運命である。然るに佛教の御話を聞かんと稱する人の中に、悲觀的運命論を唱ふる人が往々有て、佛教と云へば、たゞ消極的、退嬰主義、已むを得ざる明らめ主義の如く心得て居る者がある。これが爲めに、人生の事業を誤まるのみならず、如來の御慈悲を聽聞するのに、自分の一心専念になる事を忘れて、信心の得られぬのも因縁である、安心の出来ぬのも運命であると云ふて、一番大切な精神上の事を、投げやりにして置く人がある。是は大いなる誤りである。此の如き人は、蓮如上人の深く誠め玉ふ所であります。今から「御一代記聞書」の本文を拜讀いたします。

一。時節到來と云ここ、用心をもし、そのうへ

に事の出来候ふを、時節到來とは云へじ。無用心にて事の出来候ふを、時節到來とはいはぬ事なり。聽聞を心がけてのうへの、宿善無宿善とも云事なり。たゞ信心はきくにきはまることなる由、仰せの由に候ふ。

九。盛者必衰、會者必離は、何人も否む可らざる眞理であつて千萬年の昔より今日今時に至るまで、一分間の休みもなく行はれて居る。盛んなる者は必らず衰へる、小野の小町がいか程の美人にしても、其花の顔は永く持ち續けることは出来ぬ。「花の色はうつりにけりないたづらに、我身世にふるながめせしまに」とは、小野の小町がこの眞理を悟つた歌である。師弟の間が、如何に親

密であるにもせよ、會ふた者は必らず離れねばならぬ。親鸞聖人が御年三十五歳にして、越後の國に御流罪に御遇ひなされ、同時に法然上人は、土佐の國に遷されました。今まで東山吉水の草庵にて、師弟ともに彌陀の本願を喜び、いつまでも同じ草庵の中に御物語を致さんごころ思ひしに、思ひもよらぬ御難題にて、師弟俄かに東西に別るゝ事となつた。其御出發の前夜、親鸞聖人は小松谷の御堂に御座る法然上人の許に參つて、御暇乞を申し上げし時、「會者定離ありごはかねて知りながら、きのふけふごは思はざりしを」この御歌を、師の御前に捧げて、互に離別の御涙に暮れたご申すことである。盛者必衰、會者定離が、天地の眞理である已上は、何人ご雖も、また何物ご雖も、この眞理の網の外に出

るごは出來ぬ。

一〇。されば、建てられた家は必らず敗れ、植へられた樹木は必らず枯れる。咲いた花は散り、満た月は虧ける。家にも樹にも、花にも月にも、皆一定の運命を持って居る。されば、敗るべき時が來れば、いかほど保護しても家は敗れる。散るべき時が來れば、いかほど惜んでも花は散る。そこが時節到來である。たゞ枯れる事や散る事のみでなく、花の開くのも、樹木の榮ゐるのも、皆時節到來である。世の諺にも、まかぬ種は植へぬごありまするが、種をまかずに、花の咲くのを待つごいふ道理はない。佛教の上で、宿善ごいふ事を申します、詳しく云へば、宿世の善根ごいふ事である。宿の世に善根を植へて置けば、此世に於て必らず其結果が

顯はれる。まいた種から花を生ずると同じことである。そこで唯  
 宿善といふたよりも、宿善開發といふた方が却て分り易いのであ  
 る。宿世に善根の種を植わて、それから報ひの花を開くのである  
 から、宿善開發であります。然かし其宿善といふことは、此世に  
 生れるより前と限つた事ではない。去年の勉強は、今年の宿善と  
 なり、先月の徳行は、今月の宿善となる、一日一日と宿善が積も  
 るのであるから、此世で勉強した人が此世で出世し、少年時代に  
 辛苦を積んだ人は、老後に至りて果報を受けるのである。如來の  
 御慈悲を聽聞する事も、やはり其通りで、去年聽聞した事は今年  
 の宿善となり、先月聽聞した事は、また今月の宿善となる。それ  
 が積つた所で、疑ふに疑はれず、逃げるに逃げられぬやうになつ

て、信心の花を開かせて貰ふことである。そこを蓮如上人が、世  
 間の事と引合せて、用心をした上の病氣、用心をした上の火事こ  
 そ、時節到來と申すべきものなれ、火の用心もせずに火事を起し  
 食物の用心もせずに病氣をして、時節到來とは云はぬぞ、幾度も  
 聽聞した上に、尙ほ信心が得られず、如來の御慈悲に安心が出來  
 ぬならば、それこそまだ宿善の花が開けぬのであるから、今一層  
 心を勵まして、花が開けるまで聽聞せねばならぬ。然るに佛法に  
 心もかけず、聽聞の耳も傾けずに、まだ宿善が開けぬから、信心  
 が得られぬと云ふのは、それは自暴自棄といふもので、宿善の罪  
 とは申されぬぞと、厳しく御誠め下されたものである。  
 一一。今の御教訓の、一番終りの所に、「たゞ信心はきくにきは

「まる」この御一言は、誠に大切な所であります。聞くことを離れて、如來の御慈悲に夜の明ける時節はない。そこで淨土眞宗の礎とも云ふべき願成就の文に、聞其名號とあつて、釋迦如來は唯聞けど仰せられて、南無阿彌陀佛の名號の謂はれを聞けば、初めて信心が得られるのであるから、聞くといふことが宿善の種を播くことである。孔子も「論語」の中に、「朝に道を聞て夕に死すとも可なり」と申されてありますが、道を求むるに就て、一番大切なことは、聞の一字である。聞くことをよそにしては、安心することとは出来ませぬ。親鸞聖人が、御年二十九歳にして、他力信仰に入られたと云ふのも、吉水の草庵に於て、法然上人の御化導を聴聞いたしたからである。聞けば初めて彌陀の本願の起りが分る。

其本願の起りを尋ねれば、佛の御慈悲は、悪人女人が煩惱のために苦しめられ、悲惨な生活をして居る者を憐み玉ひ、我れ何卒して此悪人を救ひ、煩惱の火中を遁れて、涅槃の悟りに至らせたいと、大慈悲の御心に催されて、已むにやまれぬ思ひより、一大本願を起させられた。本願とは根本の願ひと云ふことである。私共は煩惱に苦しめられる時、何卒この苦しみを免がれたいと願ひますが、私共の願ひよりも先きに、佛の方に御願ひを立てさせられてある。それが即ち佛の本願である。私共は、自分の心の上を省み、今日までの行ひを振かへつて見れば、自から戦慄かすに居られぬ。苦まずに居られぬ。されど亦如來の御本願の起りを聴聞すれば、「一切群生海、無始より已來、乃至今日今時に至るまで、穢



悪汚染にして、清淨の心あることなく、虚假諂偽にして、眞實の心あることなし。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲愍し玉ひ、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じ玉ひし時、一念一刹那も、清淨ならざる事なく、眞心ならざることなし」と、御本願の起りを聞て見れば、煩惱の汚れは、佛かねて御承知である、心中の暗黒は、永劫の昔からの御見ぬきである。御承知の上で、煩惱具足の者を、其儘たすけ玉ふと聞けば、今は悲しむこともなく遠慮をいたすこともない。たゞ我れを憐み、我がために本願を立て玉ひし御慈悲のほどが難有いと、如來の御慈悲が我心に侵み込んだ時、初めて煩惱の重荷を卸して、如來の御手にまかせ奉り、自分でこそ始末をつけねばならぬものを、今は如來の御計らひに

まかせて、愚痴も妄念も起らば起れ、その後仕舞ひは、如來の御手にある事ぢやと、安心安堵の思ひに住して、此世一生を心安く過すことが出来る。其安心の初めは、如來の御本願の起りを聞たからである。故に蓮如上人は、「たい信心はきくにきはまる」と仰せられたのである。されば用心をした上の病氣、用心をした上の火事は、實に時節到來で致方もないことである。聴聞をした上にも、御慈悲が信せられぬといふなら、それこそ眞に宿善開發の時が来ないのである。然かし乍ら、聞かすにおいて宿善が来ぬと云ふは、最も不道理なことぢやと申さねばなりません。何卒世間の仕事の忙しい中からも、聴聞には心を留めたいことであります。今晚はこれにて散會にいたします。

第十五回 一宗の繁昌と申すは

一。近代の大徳と云はれた七里恒順師の御話に、「佛法が衰わたと歎息する人は、それは佛法の衰わたのではなくて、其人の信心の衰わたとのちや」と申されたと云ふことである。如來の御慈悲は久遠劫の昔から今日まで、更に變らせ給ふ所なく、常に我等を慰れみ、苦惱の衆生を愛撫して下される。私共の心の上に、一たび信心の花が開けて、この罪惡深重の私を、愍み玉ふ大悲の親様ぢやと、如來の御慈悲に氣づかせて貰へば、寢るも起るも、常に大悲の御手に懷かれて居る身分である。この自覺ある人の口から、佛法が衰わたとの言は出ない筈である。既に佛法が衰わたと歎息

する時は、其人の信心が衰わて居ることは明白である。

二。嘗て豊臣太閤が、朝鮮征伐の軍を出された時、明の朝廷から朝鮮への援軍として、李如松を總大將とし、二十萬騎の大兵を遣はされたが、我が日本軍の先鋒たる小西行長と、李如松の大軍とが、平壤に於て衝突いたしました。小西行長は、頗ぶる苦戦したけれども、兵力に於て大變の違ひがあるので、遺憾ながら明の大軍に斬り立てられて、平壤の城を明け渡して退却を始めました。行長が敗れたとの報知が、日本軍に傳はるや否や、我が諸將は俄かに恐氣たちて、我も我もと退却を始めました。其時、唯獨り小早川隆景が申すには、諸將は我が軍が敗北したと云ふて騒ぐけれども、この隆景は、いまだ日本軍が敗れたとは思はぬ。若し此

隆景の白髪首が明軍に取られたならば、それこそ誠に敗軍であるが、この白髪首が嚴然として存する間は、決して敗北ではない、縦令ひ諸將は退却しても、この隆景は退かぬ。若し明軍が押し寄せて来るならば、快よく一戦して、敵軍どもの膽玉を破り、其後退却いたしても、敢て晚いことはない。若し吾れと思はん者あらば、踏み止まつて隆景と共に一戦せよと申した所が、柳川の城主立花宗茂が、然らば某も止つて一戦すべしとて、陣の備へを整へて待つ處に、勝ち誇つたる明の大軍は、潮の如く押しかけて参りました。其時隆景、宗茂の兩人は、右と左より明の大軍を引包み激しく斬り立てた所が、敵は忽ち總崩れと成て退却し、大同江に追ひつめられて、水に溺てれ死んだ者だけでも、數萬人であつた

と申すことである。朝鮮征伐の時に於て、軍功を建てた將士も澤山ありますが、我國の面目を持ち、危急の際に當つて、毅然として動かなかつた小早川隆景の偉勳は、千歳までも傳ふべきものである。小西行長の敗北した時、若し隆景が落膽して、我が軍は最早や是れまでなりと思ふたならば、日本軍は確かに總崩れをしたに違ひはない。然るに隆景一人踏み止つて、我が白髪首の存する間は、敢て日本の敗北でないと言つたは、武士道の精華たるに、信念の力が、いかに強固なるかを證明して餘りがある。いかにも七里恒順師の仰せの如く、佛法の衰へたのではなくて、其人の信念の衰へたのである。平壤の一戦は、日本軍の敗北ではなくて、敗北と思ふた諸將士の敗北である。其證據には、敗北と思

はなかつた隆景は、見事に明の大軍を撃破したではありませんか  
 三。それを思ふにつけて、思ひ出さるゝは、清澤先生の信念で  
 ある。明治二十九年に、大谷派本山の改革問題が起り、宗教界の  
 腐敗した事情が暴露せられた時は、信仰の熱度が一時に冷却して  
 戦争に譬へて言へば、總崩れと成た時である。少しく心ある人は  
 宗教界を脱して、他の方面に活路を求めんとした時代である。此  
 時に當つて、先生は少しも騒ぎ玉はず。宗教の改革は、制度の改  
 革よりも、人心の改革が必要である。着眼せられて、靜かに三河  
 國大濱の草廬に歸へられ、徐ろに鋭を養ふて、他日東京に出で、  
 本郷の森川町に浩浩洞を開いて、他力本願の信仰を宣傳し、如來  
 の大悲は悪人救済を以て本意とす。故に如來は我等の行爲に就て

は、凡ての責任を負んで下される。罪惡に苦しむは、如來の御慈  
 悲を知らざるが故である。諄々々他力本願の深旨を説かれたの  
 で、今まで五里霧中に迷ふて居た青年も、再び引返して宗教の本  
 城に腰をすねる事に成つたので、今日の青年の間に流れて居る信  
 仰は、清澤先生の、絶對他力の信仰に源を發して居る事は確かだ  
 ある。凡て國家に革命の起る時は、制度や規則の革新が第一着で  
 文學や宗教の革新は、二三十年後るゝのが歴史上の原則である。  
 なせと申すに、制度や規則は外面の事であるから、一朝にして改  
 むることが出来るけれど、文學や宗教は、精神上の問題であるか  
 ら、急に變化せしむることが出来ぬ。そこで政治の革新よりは、  
 大約二三十年後るゝ事となつて居る。我が國の政治は、維新の王

政復古に由て、一大變革を起したけれども、其時の文學や宗教は  
 まだ昏睡状態に在たのである。それが現今に至つては、全く當時  
 の面目を改めて参りましたが、若し他日明治の思想史、特に宗教  
 の變遷史を書く人があるならば、必ずや明治二十九年より三十  
 年にかけての、大谷派本願寺の革新を起源として、清澤先生の絶  
 對他力の信仰宣傳を以て、第一の變遷時期と定むるに違ひはない  
 今日こんにちの信仰界は、非常に生氣を帯びて來た、實際的に成て來た、  
 信仰と人生問題とが密接して、信仰に由て人生問題が解決せらる  
 るやうに成たから、日常の生活の上に、頗ぶる信仰の光りを顯は  
 すやうに成た。此信仰の氣運は、確かに清澤先生の呼び起した所  
 のものである。明治三十年の前後に於ては、何人も佛法の退衰を

歎息した時代である。然るに清澤先生は、敢て歎息の聲を發し玉  
 はぬのみならず、三千年の古へに、印度の王舍城に於て、提婆阿  
 闍世の大騒動を以て、淨土教勃興の一大因縁なりと仰せられし親  
 鸞聖人と同じく、本願寺に起りし革新を以て、眞宗興隆の如來の  
 御方便なりと仰せられしは、私が確かに聴き得た所である。世人  
 の歎息する時に、先生はひとり歎息し玉はぬ。何事も如來の我に  
 與へ玉ふ警策にして、我は是に由て、愈々人生の恃む可らざるを  
 知り、如來こそ唯一の依頼すべきものなる事を、切實に信知する  
 ことが出来ること喜び玉ふ下から、何の佛法衰退の歎息が起りませ  
 うか。是に至つて七里恒順師の云はれた、佛法の衰退を歎くのは  
 其人の信仰の衰れた證據であることの一言は、清澤先生の態度と相

待ちて、益々其眞理たることを證明する次第である。是から蓮如上人の御教訓を拜讀いたしますから、「御一代記聞書」の第二百二十二條の處を開けて下さい。

一。一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なることにてはなく候。一人なりとも人の信を取るが、一宗の繁昌に候。然れば専修正行の繁昌は、遺弟の念力より成ずとあそばされおかれ候。

四。この御物語は、蓮如上人が、越前國吉崎御坊に於て、報恩講御執行の時の御言であることである。當時諸國の參詣人が、吉崎の御堂に充滿して、あまりに盛大であつたから、御弟子

法敬坊が、上人の御前に參つて、淨土眞宗はいかにも繁昌して參りました。あの參詣人を御覽せられよ、堂の内外に満ちて居りますと申し上げし時、上人は折り返して、一宗の繁昌と申すは、人の頭數の多く集て、威光の盛んなことを云ふのではない、一人でも信心を得て、如來の御慈悲を眞實に喜ぶ人の出來るのが、まことの一宗繁昌であるぞよと仰せられたのである。専修正行の繁昌と云へる言は、覺如上人の「御式文」の中の御言で、其處には、「他力眞宗の興行は、すなはち今師の知識よりおこり、専修正行の繁昌は、また遺弟の念力より成す、ながれをくんで本源をたづぬるに、ひごへにこれ祖師の徳なり、すべからく佛號を稱して、師恩を報すべし」と申してあります。祖師聖人の御流れを汲んだ

者は、僧侶も同行も皆遺弟である。遺弟とは、祖師聖人以後の御弟子と申すことで、私共は、一人一人が皆祖師聖人の遺弟であることを忘れてはならぬ。念力とは信念の力と申すことで、一人たりとも、信心を得て念佛相續する者があるならば、其信念が妻にも及び子にも及び、兄弟親族に及び、近隣同朋に及ぶから、如來の御慈悲が次第に傳はつて行く。一本の薪に火が附けば、二本三本と次第に火がもね附くと同じ事である。いかに如來の御慈悲がましませばとて、信心喜ぶ人がないならば、御慈悲の傳はる筈はない。一人にても眞の信心を得る人があるならば、それこそ一宗繁昌の基であるから、祖師聖人の御流れを汲む人は、一人一人が一宗を繁昌に趣かしむる任務のある者ちやと心得て、信心相續の

上から、慈光宣傳のために力を盡して貰はねばなりません。數學家の御話によりますと、西國三十三番の觀音に參詣するのに、一番の觀音に一厘の御賽錢を上げ、二番の觀音に二厘を上げ、三番には四厘、四番には八厘、五番には壹錢六厘を上げると云ふやうに、順次に陪増に上げて行く、十番の觀音には、五拾壹錢貳厘を上げ、二十番の觀音には、五百貳拾餘圓を上げ、三十番の觀音には、五拾參萬餘圓を上げ、最後の第三十三番の觀音には、四百貳拾九萬何千圓を上げる事になるので、それを第一番目から總計算をすると、壹千萬圓近くになると云ふことである。されば自分一人が、眞に如來の御慈悲を喜ぶならば、佛法は衰わる所ではない、前途に充分の望みがある。自分の信する所を妻に傳へ、今度

は自分と妻とが心を合せて、一人宛の信者を作ると云ふやうにして行けば、今の三十三番の観音の御話と同じところで、澤山の念佛行者が得られる事である。此點から考へて見ると、蓮如上人が、一人たりとも人の信を取るが、一宗の繁昌ちやと仰せられ、また専修正行の繁昌は、遺弟の念力より成すこの御教訓を拜聴いたすこと、難有いことも恐れ多いことも、申し様のない次第である。今の御言の、一人たりとも信を取るが、一宗の繁昌ちやこの御教訓は、單に宗教の上のみならず、國家の上にも家庭の上にも、深く味ふて行きたい事であります。

五。嘗て英國の巡洋艦ビクトリア號が、地中海を航行中、誤つて暗礁に乗り上げ、まさに沈没せんとした時に、艦長が今を最後

と思ふて、ビクトリア號の中を巡視いたしました所が、水兵士官等は、平素教訓をいたした通りに、砲手は大砲の前に控わ、水先案内は船の先頭に立ち、汽鐘を動かす者は、汽鐘の前に立ち、錨を下す者は、一令の下に錨を下さんとして居る、一人として自分の職務を怠つて居る者はない。此有様を見るや否や、艦長が深く喜んで申すには、英國が世界に於て、第一番の強國ちやと云はれるのは、軍艦の数が多からではない、軍艦はいかに堅固に作つてあつても、一度暗礁に觸るれば裂けて仕まうが、軍艦が今にも沈没せんとする時に當つて、自分の職務を忘れずに、其持場を堅めて動かぬといふ精神のある水兵士官の多いのが、英國の強い所以である云て、深く全艦の將士の沈勇の態度を稱讚したと申す



ことである。家の土臺を御影石で堅め、倉庫の壁を煉瓦で造り、窓の扉を鐵張りにいたしても、是れではまだ堅固な家と稱する事は出来ぬ。我が身が如來の御慈悲を信じ、妻も一味の信心に住して夫が病氣になつても、家が貧困になつても、信心の中に安慰を得人生の荒浪の中にも、平和に進むことが出来るならば、それこそ誠に堅固な家である。煉瓦の壁や鐵張りの扉は、いまだ以て堅固と稱するに足りません。眞の堅固は精神に在る、世の中に何が強いと申しても、死して遺憾なしと決心したる人より強い者はありません。

六。然かし、其死して遺憾なしと云ふ決心は、何處より起るものであらうか。私の知人に、三四年來、病氣に惱んで居る人があ

ります。先日其人に出遇ふて、胸中の所感を聞て、私は深く喜びました。その人の申すには、人生だけの事は、色々に説明をつけ自から慰める事も出来ました。なるほど病氣に惱んで居るのは、自分の不幸である。妻に貧苦の浮目を見せるも、實に人生の悲惨である。然かし乍ら更に想ひ廻らせば、人生の運命は、過去より定まる約束事である、自分もこれだけの果報を受く可き種を播き妻も亦同じ種を播いて來たのであらふ。して見ると今日の境遇は人のした事ではなくて、我が身の作つた運命である。特に世の中を見渡せば、病に苦しむ人は我身一人ではない。貧苦に沈む者は我が妻一人ではない。かやうに考へて來ると、佛教の因果説に由ても、哲學の宿命説に由ても、若くはエビキエラスの快樂説に

由ても、何かと説明がついて、其日其日の慰安を求めて居ました然るに病氣の模様によつて、自分はやがて死の門に入るのではないかと、一旦氣づくや否や、我が身は忽然として生死巖頭に立て居る。眼下を見れば千尋の溪である、我が身を顧みれば、罪惡の重荷を背に着て居る。荷物は重く、足は弱く、千尋の溪底は暗黒である。今は因果説も快樂説も、我心を慰むるに足らぬ。此世に生き永らへて居ると思へばこそ、是も因縁である。あれも約束事である云ふて居るが、今はそんな問題ではない、死の問題である此に至つて眞の苦悶、眞の罪惡觀に陥りて、何方を見ても、人生の上に光りを見出すべき餘地がない。それから後と云ふものは、「歎異鈔」と「御文」とを拜讀して、頻りに慰安を求めましたが

どうしても安心する事が出来ぬ。苦悶に苦悶を重ねた果てに、「御文」を拜讀して、「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心を以て本とせられ候ふ。そのゆへは、もろくの雜行をなげすて、一心に彌陀に歸命すれば、不可思議の願力として、佛のかたより往生は治定せしめたまふ」と云ふに至つて、如來の御慈悲がひしくと身に浸みこたね、たい涙の下るを禁することが出来ぬ。なるほど不可思議の願力である、凡夫の自力が間に合はず、宿命論も快樂説も役に立たず、我が智識才能が盡き果てた上は、理窟もいらぬ、説明もいらぬ、たい不可思議の願力である。佛智不思議の誓願である。我が方に心配するのではない、佛のかたより往生は治定せしめたまふのである。私はたい此不思議の佛智を信するのみ

である。久遠劫の初事に、今ぞ始めて大悲の親に巡り遇せてもらふた。此上は、死の迎ひは何時來ても大丈夫である。罪惡の重荷は如來にまかせ奉つた、彌陀は南無阿彌陀佛の風呂敷の中に、私の汚れた衣物を、皆包みて下された。今は自分は正定聚の衣物に着換へて、攝取不捨の御座敷に坐つて居る。眠つて居ても愚痴をこぼして居ても、若くは不生者の御約束は變らせられぬ。嗚呼難有い事であるわいと。忽然と信心の眼を開いて見れば、生死巖頭に立て、千尋の溪に臨んで居た身は、今は千里渺茫と打ち開けた、本願一實の大道を進んで居る。何時死するも遺憾なしと決心して見たれば、三四年來氣にかゝつた病氣が、更に氣にかゝらぬやうになつた。愚痴の煩惱の起る時は、氣にかゝらぬではないけれども

更に御慈悲に立ち歸つて見れば、病氣の極まる所は死ではないか死の導く所は何であるか、不可思議の願力として、佛のかたより往生は治定せしめて下されてあるではないか。是からさきは如來の御心配に屬すべきもので、私の心配すべき事ではないと。かやうに喜ばせて貰う事になつたれば、寝るも起るも、御慈悲一つがたよりであると申されました。私は此友の實驗談を聞いて、深く友の幸福を喜び、如來の御慈悲の透徹して下された事を深く感謝いたします。まことに蓮如上人の仰せの如く、一宗の繁昌は、人の頭數の多く集まつたのではなくて、一人たりとも信心を得る人の出來たのが、即ち一宗の繁昌である。今の友人が、海岸の小さな家を借りて、其中に念佛申して喜んで居れば、其中に早や一宗繁

昌の基が開けて居る。母親も其話を聞いて安心する、私もこれを見て喜ばせて貰ふ。若し心ある人が、此講話の記事を読んで、同じ信心に住する事が出来るならば、其處にも一宗繁昌の花が開く。實に上人の仰せの通りで、一人たりとも信心を獲る人の出来るのが、一宗繁昌の基であります。

七。私はつらく、蓮如上人の御教訓を窺ふに、實に上人は、信心の熱が胸中に満ちて居た御方である事が分ります。中に満る者は、機會のある度に外にころげ出ます。蓮如上人は、世間の御話が始まるかと思へば、直ぐに信心の御話になります。私が先般來講話いたした中でも、三箇處ほど、其證據が現はれて居ます。是は已に前にも話した事ではありますが、第一は「御一代記開書」の

初めの條で、明應二年の正月元日の御禮に、道徳はいくつになるぞと、御年を尋ねられて、直ぐ其下から、道徳念佛申さるべし、年を一つ重ねたについても、後生の大事を忘れてはならぬと、世間話が早や信心の御話になつて居る。第二は、吉崎御坊に火事が起つて、御弟子法敬坊が、御染筆の六字名號を焼失した時、焼跡の灰の中から、六體の彌陀の御姿が現はれたとて、いかにも不思議さうに申された時、蓮如上人は直ぐに折返して、それは不思議ではない、六字の名號が佛體と現はれるは當り前のことである。十惡五逆の惡人凡夫が、彌陀を信する一つで佛になるのが、眞の不思議ぢやと仰せられました。第三には、今晚の御話の所でありまして、法敬坊が參詣人の多いのを見て、一宗の繁昌を喜ばれた

時、上人は、一宗の繁昌は人の多く集まつたのではない。一人たりとも信心を得る人の出来るのが、一宗の繁昌である。仰せられた事であります。これほどの御精神で、一念機微の間も、如来の御慈悲を忘れ玉はねばこそ、終に一宗を再興いたされた事と思ひます。

### 第十六回 同行善知識に親むべし

一。精神修養の上に於て、最も大切な事は、友を選ぶといふ事である。誤まつて一たび悪友と交りを結はゞ、容易に其關係を切る事が出来ず、悪事と知り乍らも、終には罪惡を犯し、其身の悲運を招き、人世の失敗者として一生を終らねばならぬ様に立到

ることである。かの阿闍世王が、父の頻婆娑羅王を殺害し、また其母親を幽閉たるが如きも、其本を云へば、悪友提婆に親んだからである。其後阿闍世王は、非常なる苦悶に陥り、父王を殺害したる事を後悔して、良心の呵責に堪へず、身體には種々の浮腫物を生じて、日夜苦悶せられた時、耆婆大臣の諫めに従ひ、終に釋迦如来の御許に参りて、安慰の法を聽聞せんものと決心せられ、兩人相携へて旅途に上られた時、釋尊は遙かに此有様を照覽あらせられ、御弟子に申して云ふには、汝等よく聞けよ、道を求むるには善友より善きはなし、かの阿闍世王も、悪友の手を離れて、一たび耆婆大臣に親むや否や、其勸めに由て、殊勝にも終に佛法を求むるやうに成られたよとて、深く御歡びになりました。また

昔の或賢人は、白糸を見て泣たど云ふ事である。何故なれば、白糸は青色にも赤色にも、これを染めることは自由である、人間の精神も宛も白糸の如く、其友達の奈何に由て、善ともなれば悪ともなる、誠に大切なことであると感じて、かやうに白糸に對して涙を流したものであります。されば今日の青年諸子が、信仰を求め、一如來の懷の中に安住し、人生活の上に修養を積んで、健全の人となり、男子らしき人となり、成功の人となり、善良の人とならんとするには、是非とも友を選び、其善良なる者に親みて、害悪なる者に遠ざからねばならぬ。

二。「孔子家語」と申す書物の中に、「善人と居れば、芝蘭の室に入るが如し、久しくして其香を聞かず、不善人と化す。不善人と居れば、鮑魚の肆に入るが如し、久しくして其臭を聞かず、亦之と化す、是を以て君子は、其與に處る所を慎む」と申してあります。清香を放つ所の、蘭花の咲て居る室に入れば、初めは蘭の香

ひが身に染みて、何ともいへぬ清き香ひに打れますが、五日も十日も續いて、其室内に坐つて居れば、終には其香ひがせぬやうになります。何故と申すに、其清香が我が身の全部分に染みこんで我身にも清香を帯び、蘭花よりも清香を吐て居る。兩方同じやうに、一味の清香を持て居るから、別段に蘭花の香ひを感せんのである。また不善人と一處に住居して居ると、丁度鹽物魚の肆に入つたやうなものである。最初は其臭氣に堪へられぬやうにありますが、五日も十日も續いて、其肆に住みこんで居ると、更に其臭

氣に氣づかぬやうになります。何故と申すに、その魚の臭氣が、自分の全身に染みこんで来る故に、自分と魚と同じ臭氣を有するから、別に魚の臭氣に氣づかぬ様になるのであります。善人と一處に居ると、最初は、善人の美德が目につき、自分の如き悪人と善人との間に、分明とした水際が立て、善人の香ひが非常に能く我々の精神を刺戟しますが、永らく同居して居る中に、自分も善人と同化せられて、朝早く起きる、勉強をする、親孝行をする、心を正直にすると云ふやうに、其性行が變つて来るから、自分と善人と同じ位置になつて、善人とても別に目立たぬやうになるのであります。善人と一處に居り、また悪人と一處に居ることが、かほごまで影響するとして見れば、慎みても慎むべきは、友を選

ぶの一事であります。故に信仰を求むる人は、最初は人まねでもよいから、佛前に禮拜を遂げ念佛を申すがよい、かやうに致して居れば、聽聞の度を重ねる毎に、一度は一度より難有くなつて、終には佛智の不思議を信することが出来ます。我が力で信するのではなけれども、如來の御慈悲が透つて下さるので、終に信仰の光りに到着することが出来るのであります。此邊の意味合は、「御一代記聞書」の文の上にて、更に御話を進めて參る積りであります。

一。同行善知識には、能々ちかづくべし、親近せざるは雜修の失なりと、禮讚にあらはせり。惡しき者にちかづかば、それにはならじと思へ

ごも、惡事よりくりにあり。只佛法者には、馴  
ちかづくべきよし仰られ候。俗典に云く、人の  
善惡は近習によるご。又その人を知らんごおも  
はゞ、その友をみよごいへり。善人の敵ごはな  
るごも、惡人を友ごするごごなかれごいふ事あ  
り。

三。善導大師が「往生禮讚」の中に、專修の得、雜修の失を舉  
げて、佛の本願を信じ、一心に念佛して、餘行餘善に心を振り向  
けぬ者は、十人は十人ながら、百人は百人ながら、皆ごごとくく  
淨土に往生する。これに反して雜行雜修の人は、千人中に一二人  
千人中に三五人の往生人を見るのみで、其他の人は、みな淨土往

生の大事を誤まる者である。何故なれば、雜修の人には、十三通  
りの缺點があるからぢやご御誠めあらせられて、その第十二番目  
に、人我自ら覆ふて、同行善知識に親近せざるが故なりご申して  
あります。大悲の親の御手許に、凡夫往生の眞因たる、南無阿彌  
陀佛を成就して下されてあるのに、この佛智不思議の威神力を信  
せずして、自力我慢を恃み、小善小功德を以て、往生の因ごなさ  
んとする者は、自分の眞實の力量を見誤つて、よほご上等なもの  
ぢやご心得て居る。従つて凡夫の心の、虛假不實な事に氣づいて  
居らぬ。それ故に、他人をば師匠ごせず、自分一人を善い者ぢや  
ご思ふて居るから、他人の美德を覆ひかくすと共に、自分の良心  
も覆ひかくされて、我身の弱點に氣がつかぬ。これが即ち、人我



自から覆ふて、同行善知識に親近せぬと申す者であります。人間の一番危ない事は、貧困でもなく亦病氣でもない。たゞ自分一人を豪い者ちやと思ふて、人を師匠とせぬ事である。これが敗滅の原因である。佛蘭西のナポレオン三世は、随分豪傑で、世界英傑傳の中には、必らず載せられる人である。然し乍ら自分の豪慢が長して、他人を師とせず、普魯士亞を見ること、小兒を見るが如きに至つて、最早や眼中に、自分に敵する者がなと思ふた。此に於て普佛兩國の戦ひが起つたが、僅か一年間の戦争に、初めから終りまで、連戦連敗で、セダンの大戦に敗れ、メッツの城塞に於て、終に普魯士亞の軍隊に取圍まれて、恥辱を忍んで敵軍に降服し、自國の佛蘭西に歸ることも出來ず、終に英國に客死して、

世界の笑ひ物となつた。かゝる悲運の出發點は、言ふまでもなく他人の長所を認めず、善人賢士の言を聞かず、唯自分一人が豪いものちやと思ふて、猥りに軍を興したのが其原因であります。これに反して、我國の史上の美談となつて居る源の義家は、智徳ある人を尊長して、其教へを受たから、千載の名を爲し遂たのである。即ち義家は、父賴義に従つて、安部の貞任を征伐せんがため奥州に留まること九年、其間に充分に戦争の経験を積み、終に貞任を滅ぼして仕舞つた。然るに義家京師に歸りたる後、大江の匡房が、義家を批評して、渠れ將才あり、惜むらくは兵法を知らずと申されました。義家の家來は、此一言を聞きて非常に怒り、直ちに義家に告げて、匡房の不都合を詰らんものと思ひしに、義家

は之を抑し止め、匡房の我を批評せられしには、必らずや故こそあらめと、直ちに其門に至り、禮を具へて弟子となり、兵法の講義を聞ききました。これに由て戦術の上に、非常に得る所がありました。其後奥州に再び亂が起りて、武衡、家衡の二人が朝廷に背きました。義家は朝廷の命により、再び奥州征伐の途に上りました。此時敵軍は、金澤城に立籠り、城を距ること數里にして、蘆荻の叢をなして居る所を選んで、精兵五百人を伏兵とし、義家の通り過ぎたる後から斬りかゝつて、城中城外一時に立ちて、義家を一舉に破らんと謀つて居りましたが、義家が兵を進めて、かの蘆荻の叢邊に至るや、俄かに令を下して進軍を止めました。さて臣等の者に申さるゝには、吾れ匡房に就て、兵法を學びたる時

其中に、鳥亂るゝ者は伏なりと申すことがあつた。いまあの蘆荻の真上に當り、數行の雁が列を亂して、俄かに驚き騒ぐを見ればかの蘆荻の中には、必らずや敵の伏兵があるに違ひはない、急にかの蘆荻を取圍み、一騎も漏す可らずと命じ、大ひに搜索したる所、果して敵の伏兵あつて、難なく之を討取て、終に金澤城を攻め下し、武衡、家衡をも討亡ぼして仕まひました。義家自からは前九年の征伐に於て、充分戦争の實驗を積んで居るに拘はらず、更に大江の匡房に就て、自分の知らざる所を學んだと云ふは、實に古今の史上に比類稀なる美談であります。故に千載の名を爲すことが出来たのであります。然るに自分を豪い者ちやと定めて、有徳の人に近づかず、師長の教へを拒むといふ人は、其身の成功

は愚か、終には敗滅に歸せねばなりません。故に善導大師が、自力雜修の人が、往生の大事を仕損する原因を擧て、人我自から覆ふて、同行善知識に親近せざるが故なりと誠められたのであります。この善導大師の御言を、蓮如上人が引事にして、同行善知識に、能々ちかづくべし、親近せざるは雜修の失なりと、禮讚にあらはせりと仰せられた事でありませぬ。

四。悪人に近づく時は、自分に警戒して、決して悪事に染つてはならぬと、注意しながらも、何時の間にか悪に染りて、自分も進んで悪事をなすやうになる。そこは前にも申す通り、不善人と一處に居るのは、鹽物魚の肆に居ると同じ事で、どうしても其臭ひに染められるのである。若し佛法者に近づきて、其行ひを見、

其御話を聞て居ると、終には如來の御慈悲が身に染みこんで、いつとはなしに自力我慢の頭が下り、他力の御慈悲でなくては、とても凡夫のたすかる道はないと、終には本願他力に歸入する事である。本文の上に、俗典に云くと題して、人の善悪は近習によるとあるのは、多分前に申しました、「家語」の言の意によつて仰せられたものと見えます。次の、其人を知らんと思は、その友を見よとある言は、やはり「孔子家語」の中の言でありまして、前の善人芝蘭の章の、直ぐ前の段に、不知其人、視其友、とありませぬ。此一段は全く「家語」に御據りなされたは確かであります。直接に其人物を知ることが出来れば、それに増した事はない。然かし交際はして見たいが、まだ充分に其人物を知る事が出

來ぬと云ふならば、其人の友達を見るが早分りである。友達が善人であれば、其人も必らず善人に相違はない、友達が悪人ならば其人も必らず悪人に相違はありませぬ。これほど友達と云ふものは大切なものであります。其次の段に、善人の敵とはなることも、悪人を友とするなかれとは、本は「十誦律」の中にある御言で、「寧ろ智者と讎するよりも、無智者と親む莫れ」とあります。此意味を取て、善人の敵とはなることも、悪人を友とする莫れと仰せられたものと見えます。儒者や哲學者の上にも、種々の教訓があります。このほど親切な教訓は多くはありません。善人を敵とする事は、決して善い事ではない、然かし悪人を友とする事と比べて見ると、此方がまだ餘程勝れて居る。何故なれば、善人を敵と

すれば、終には善人に感化せられて、自分も亦善人となる事が出来る。辨圓が親鸞聖人を敵として、終には其徳に感化せられ、念佛行者となつて、目出たく浄土往生を遂げた如きは、皆人の能く知る所であります。故に親鸞聖人も、「信順を因とし、誹謗を縁とす」と仰せられてありますが、佛法を信せぬならば、せめては佛法を誹るがよい。佛法を誹る事が善いのではないけれども、佛法を聞きもせず誹りもせず、無關係で居るよりは尙勝る所がある。自分の方では誹る積りでも、如來の方より云へば、誹る所に早や佛法を信する因縁を結ばせて下されたのであります。

五。阿米利加合衆國を開いた、絶代の英雄ワシントンが、まだ陸軍の中佐位で、或聯隊の長官を勤めて居る時分に、ペーチと申

す將官と、意見の行き違ひで、ペー子に怒つて、手にせる鞭を以てワシントンに充分に打ちました。此事を聞くや否や、渠れの部下の一隊は、勢を揃へて繰り出し來り、我が長官の恥を雪いで、充分にペー子に復讐せんと意氣卷たが、渠れは固く抑し止めて、一先づ自分の兵營に歸りました。さてワシントンが兵營に歸つて思ふには、今日の事は自分の方に手落がある、ペー子の怒るも尤もである。此上は謝罪をせねばならぬと。直に書面を以てペー子に會見を申しこみ、或る料理店にて、何日何時に御目にかゝりたいと申出た。然るにペー子は、これを以てワシントンの復讐と思ひ、時宜に由ては決闘もせねばならぬと、心ひそかに其準備を致して參りました。ところが食卓の上に、美麗なる花を飾り、酒や

肉を積み上げてあつて、別に決闘がましい準備もない。此時ワシントンは、進み出て申すには、先日の事は、實際自分の方に過失がある、貴官の御怒りになるも尤もな事である。若し前日の打擲にて飽き足らずば、今日思ふ存分に我が背上に鞭を加われよ。若しまた前日の所置にて充分ならば、今日幸に薄酒粗肴の準備あり、願くば再び交りを温め、共に國家の事に盡力せんと言ひしにペー子も此一言に、ワシントンの海の如き度量に感じ入り、終に再び交りを結んで、米國のために力を盡したと申すことであります。若しペー子にして、悪人を打擲し、悪人を敵としたのならばこんな春風の如き會見の中に、友情を温める事は出來ずに、却て身に禍を受けたかも知れませんが、ワシントンの如き善人を敵と

した爲めに、終に其徳に感化せられ、希世の英雄と並び稱せられて、然かも國家の事に盡粹する事が出来ました。いま蓮如上人が信心を得んと思ふ者は、兎も角も、同行善知識に親まねばならぬ事を、古訓を引き、古言を並べ、尤も親切に御示し下されたのがこの第五百十條の一節であります。精神の修養と申すは、知らん事を多く聞くのが目的ではない、自分の知て居る所を、實行して行くのが修養であります。悪人を遠ざけ、善人を友とせねばならぬ事位は、大抵の人が存じて居ります。その存じて居る所を、實行せぬが爲めに、佛法にも近づかず、信仰も得られぬのであります。いまこの蓮如上人の御教訓は、言の意味はさほど六ヶ敷い事はありませんが、この御化導を聞た其日より、これを實行いたす

といふ事が極めて大切な事であります。

## 第十七回 佛法をばさしよせていへ

一。近來、宗教の研究とか、青年の求道とか云ふやうな事が、非常に盛んになつて参りましたが、是は實に結構な事柄である。然かし乍ら、其宗教の精髓を尋ね、信仰の光りを求むる方法を誤まるならば、宗教の精髓をつかまずに、徒らに其形骸をつかみ、信仰の光りに出遇はずして、研究の深山に迷ひこんで、進退維れ谷まると云ふ運命に陥ります。古人の歌に、「なかくに人里ちかくなりにけり、あまり深山の花を尋ねて」と申してあります。人里の塵を離れた、深山の花を求めんとする精神は、誠に喜ぶべ

き事である。然かし乍ら、其求める方法を誤まつて、無暗に山奥を尋ねて居ると、終には其山を通り抜けて、再び人里が近くなつて来る。人間の塵を離れた、清き深山の花に出遇はずに、元の塵埃の深き村里に出ると云ふ事は、確かに花を求める第一歩の出發點に於て、道を誤まつて居るのである。

二。然らば宗教の精髓とは何であるか、佛の心と、我等衆生の心とが、互に接觸する處に在る。人生の苦惱を脱すると云ふ事も轉迷開悟と云ふ事も、實は如來の御心と、衆生の心との接觸から生ずる事である。觀無量壽經の中に、佛心とは大慈悲是れなりとあります。如來の御心を一言に云ひ顯せば、苦惱の衆生を救ふと云ふ點にある。是れを除いては、佛の心と云ふはないものである。

然らば其如來の御心に接觸するには、如何がいたすべきやと云ふに、此處が一番大切な處である。論語の中に、「切に問ふて近く思へば、仁其中に在り」と教へてあります。孔子聖人の一生涯の教へは、人に仁を教へるより外はない。然かし其仁と云ふ事は、遠方に求めるのではない、近く我身の上求めねばならぬ。我心を離れて、遠方に仁があるのではない、故に、切に問て近く思へば、仁其中に在りと申されたのであります。信仰上の御話も、丁度これと同じことである。切に問ふて近く思へば、信その中に在りと申しても宜しいのであります。信仰上の事に就て、御尋ねをする時は、浮足ではいかぬ、切實に尋ねることが必要である。我身の現在の生活に離れられぬ、切實なる問題を提げて尋ねばならぬ。

然かし尋ねるばかりでは、信仰の光りは顯はれて來ぬ。近く思ふことが最も大切である。近く思へば必らず信仰の光りに出遇ふことが出来るのである。

三。今回、明治天皇の御崩御遊ばされたる事に就ては、國民の憂懼悲歎は申すまでもないが、この時に當つて、世間の新聞紙上に、先帝陛下の御高德を書きつらね、または御製の歌を掲げて、盛んに其聖徳を稱讚し奉つてある。國民たる者は、此徳を心に留め、先帝に酬ゆる志を以て、今上陛下に事へたいものであります。然かし乍ら、新聞紙上に顯はれたる御徳や、元老大臣方の、先帝に關する追懷談を、如何に澤山聞き覺わても、單に聞き覺わればかりでは、聖上の御徳と我等の心が、遠く馳け隔たつて、何等

の關係もない事になる。即ち聖上の御高德は、東京の王城の中、九重の雲につままれて、我等の身の上に直接に光りを放つことが出来ぬ。是に於て先きに申す通りに、近く思ふと云ふ事が必要であります。今日の我身が、何故にかやうに平和なる生活を營むことが出来るのか、其源を尋ねて見ると、必らず聖上の御徳が、近く我身の上に顯はれて下さるに違ひはない。昔日の朝鮮の人民は一日として心安き生活をする事が出来ぬ。若し平常に働いて、米穀を貯へ、金錢を所有して居ると、官吏が種々の難題を持ちかけ無實の罪に問はれて、三十日も四十日も牢屋の中に繋かれる、それを宥して貰はんとすれば、自分の家の財産を傾け盡して、之を官吏に差上ねばならぬ。こんな政事のやり方であるから、専心一



意に働くことが出来ぬ。若し働いて財産を作り、平穩に生活が出来るやうにして置けば、直ちに無實の罪に問はれて、財産の全部を取り上げられる。これが即ち、朝鮮人民の一日の平和をも得ざる原因で、國の亡びたのも、其源は此處に在ることは言ふまでもない事である。また清國の有様を聞けば、いつも外國から侮りを受け通しで、國民は一日も枕を高くして眠ることは出来ぬ。過ぐる明治三十三年には、北清事件と申して、太沽、天津より北京にかけて、一大騷亂が起り、諸外國の軍隊は、自國の公使館や人民を保護する目的で、續々北京の方に進撃する。清國の兵は之を中途に喰ひ止んとするので、随分激しき戦争も起りましたが、或亂暴なる外國兵の一隊が、通州と云ふ處を占領した時には、若き婦

人が種々の災難に出遇ふて、三百六十餘人も屍骸と成て顯はれたと云ふ事である。其時實見した人の話によれば、通州の町の一つの井の中に、あまり多く婦人の屍骸が見ゆるから、一つ一つ引上げて見た處、十六人の屍骸が上つたと申すことであります。此一事を見ても、清國の婦人が、いかに無殘な最後を遂げたかと云ふ事が分ります。然るに我國の人民は、朝鮮人の如く、官吏より苦しめらるゝと云ふ事もなく、清國の婦人の如く、外國兵に亂暴せらるゝと云ふ事もなく、平和の中に、自分自分の家事を勤めて行くことの出来るは、何のためであるか、我身現在の平和は、何人の賜物であるか、そこを手近く思ふて見ねばならぬ。近く考へて見ると、明治聖天子の御高德は、私共一人一人の生活の上に、御惠

みの露が灑がれてある、其處に氣付いて見れば、寢ても起きても聖天子の御恩の中に包まれて居る。即ち明治天皇が、王政維新の當時、國歩艱難の中に御即位あそばされ、外には西洋諸國の侮りを禦き、内には徳川幕府の末路に當つて、其處にも此處にも内亂の蜂起したのを鎮定し、明治七年には、佐賀縣に起つた江藤新平の亂を平らげ、明治十年には、西郷隆盛の大亂を克定し、明治二十七八年には、清國の横暴を懲し、明治三十七八年には、露國の專横を制壓して、東洋永遠の平和を定の玉ひ。更に戦後の經營に御心を注がせ玉ひて、我が國民の安寧なれかしと願ふあまり、炎暑燬が如き夏日にも、御避暑あそばさる事もなく、「年々に思ひやれども山水を、汲みて遊ばむ夏なかりけり」この御製を垂て、御

心の中を示させ玉ひしと拜承いたしますが、其御苦辛、其御高德は、遠い宮中の話ではない、雲の上の物語ではない、其一一の御徳が、私共の日日の生活の上に、光りを放つて下さるればこそ、御互に此やうな平和な生活をいたして居るではありませんか。されば我が一日の平安、一夜の安眠も、皆明治聖天子の賜物である、かやうに氣付いた人が、聖天子の御恵みを、近く思ひ、近く味ふた人である。君の御恩を近く味へば、忠君愛國の念は、自ら其中に存する譯である。

四。親の御恩を知ると云ふことも、やはり是と同じ事である。「孝經」の中に、親の御恩を如何説てある、小學校の教科書の中に如何やうに教へてあると、單にそれを知たのみならば、眞實の

意義に於て、親の御恩を知つたとは申されぬ。今の現在の私の身上に、親の御恩のみち／＼と居る事に氣付かねばならぬ。是に就て、第一高等學校長、新渡戸稻造氏の談話を、此處に御紹介いたします。其話に曰く、事は昨年の出来事で、時は高等學校の入学試験の際である。今は名も知れて居るけれども、これを明かすの必要もなし、あかしたなら、却つて迷惑の種子ともならうから、姓名を省いて話さう、七月の初め、一週間ばかり續いた、かの暑さの強い日が、丁度全國の、高等學校入学の試験の定日であつた中學を卒業した四月から以來、三度の食事も略する程に時間を惜み、夜も眠らず、眠氣がさせば、眼に薄荷までさして、試験の準備に餘念のない三千近くの青年が、第一高等學校の試験場に群が

り來り、いよ／＼教室に入るその刹那まで、準備を怠らぬ位であるからして、試験以前の十日間の勉強は、實に兵士の戦闘準備どころか、實戦にとりかゝつてゐると同じ感がする。即ち試験以前の十日間の慘澹たる有様は、父兄友人は云ふまでもなく、少しく今日の日本の教育、並に試験の制度を知る者は、其苦心の程、察するに餘りありと云てゐる位のことである。故に中には試験の始まる前に、既に根氣がつかたり、病に罹つたり、神経衰弱、或は腦貧血、或は不消化不眠症などに罹るものは、恐らく百を以て數へる程であらう。曩に云ふた第一高等學校の試験の初日であつたと思ふが、僕が各教室を通つて、廊下に出で、玄関の側を歩んで來ると、チラリと眼に映つたものは、分館の玄関の傍に、一臺の

人力車の傍に立つてゐる車夫と、之を隔つること一間ばかり傍に袋を手にして居る四十近くの婦人であつた。試験最中の事であれば、三千に近き青年を收容した学校も、百人近くの試験官が、見張りや監督をしてゐる中に、只水を打たやうに静肅を極めて、廊下の板をふむ巡視の靴音さへも聞かないほど静かで、殆んど人なきが如き有様である玄關に、何用あつて婦人のゐることか、その理由も一寸解し難かつたから、僕は小使に代つて、自からこの婦人に向ひ、其用を質して、若し学校の事務所の御用ならば、あの玄關へ御出でなさい、若し生徒の寄宿寮に御用ならば、そちらの玄關でお尋ねなさい、今は丁度試験の最中で、茲には人がゐないも同様であるからと注意したが、その婦人は、さもその邊の事は

承知のやうに妙な顔をして、ハイ此處で待て居りますと云ふだけで、更に動く様にも見ねなかつたから、貴女の御尋ねになる人は此處に居る人ですか、と問ふて見ると、ハイ今試験して居りますと云ふ。そんなら、先生ですか、生徒ですかと聞いて見れば、生徒でございますと云ふ。生徒ならば、まだ急に出る譯には行きませぬ、試験は十一時までかゝるから、もう二時間もありませんと注意すれば、ハイそれも承知して居りますと云ふ。そんなら、もう二時間も此處でお待ちになるのは非道ひですから、あちらに休む處があります。それとも急な事なら、私が取次であげませう、そうでなければ、十一時頃に出なほして、お出になつたら宜うございませうと心附けたけれども、この婦人は、更に去る様もなく

少し恥かしさうにして、只こちらで待て居りますと云ふだけなので、僕はますます奇態に思ふて、且つ側に車のある事故、何か理由のありさうに思ふて、重ねて其様子を質した所が、婦人が申すには、私が此處に待て居る者は、今試験をして居りますが、昨日自宅で眩がしましたから、今日も若しやそんな事はないかと思つて、茲に待て居ります。まさかの時にはつれて歸る積りで、車を頼んで参りました。それに今朝飲むお薬も、急いで忘れましたからと云ひ乍ら、懐の中に手を入れて、薬でも出しさうにするから然らば僕から其薬をのましてあげませうと云ふたが、婦人が云ふには、これは御飯の後に直頂くのですから、モウ遅くていけません、また若しや私が此處に参てゐる事でも知れると、試験のため

に宜うございませんと。それぢや名は何と云ひ、試験の番號は何番であるかと聞いて見るけれど、唯口ごもつて明了と答へをしなさい。僕は更に語を續いで、此處の試験では、毎年三四名位は、眩する者が出来たり、其他種々の病人が出来るので、監督の先生達は、さういふ事には始終氣をつけてゐられるし、また係りのお醫者もあつて、そんな事があると、恐らく貴女が御世話をなさるよりも、却て學校の世話の方が行き届くだらうと思ひますから、心配なさらずに、お歸りになつたら宜しいでせう、併し念のために番號だけ知らせてお置きなさい、決して試験の邪魔にはならぬやうに、御當人に分らぬやうにして、見張りを付けてあげます。また當人が何にも知らないやうに、醫者と監督の先生に、殊更注意

をやるやうに頼んで置きますから、安心しなさいと云ふた所が、其婦人も心に落ついたと見れて、始めて英法科の何番といふ事を告げたから、早速その教室に行つて見ると、成程その顔付が、いかにも彼の婦人によく似て居るので、彼の婦人と此青年とは、親子である事が始めて判然した。然るにその青年は、そんな事は夢にも知らず、試験に餘念のない態度であつた。僕は係員の先生やお醫者さんにも、殊更注意をたのんだ、その教場を去て、再び玄関に來た時は、母たる人の姿も、車の影も更に見わなかつた。十

一時の鐘が鳴ると同時に、彼の青年は教室を出で、下駄をはいて友人と笑ひながら話をしてゐるのを僕は認めた。これなら大丈夫だ、この様子で家に歸つたなら、母の安心はいかばかりであらう

と思ひつゝ、彼の青年の門を出で行く姿を見送つた。彼は友人の肩を叩いて、談笑しつゝ去つたが、恐らく彼の心中には、試験の事のみを以て満されて、母の苦心に心を向ける餘地はなかつたであらう、然るに安んぞ知らん、彼が無難に數時間の試験を経、その翌日も、また其翌日も無難に經た事は、彼の學力のみによると思つたら、大に見當がちがつて居りはしまいか。彼の眠られぬ時は共に起き、彼の眠つて居る際も尙眼をさまし、彼の起きぬ間にとく起き出で、彼の準備をたすけ、彼の眼や耳には更に觸るゝ事なく、彼の身邊を擁護する母の慈悲心あつて、始めて無難な試験を經たものちやと、迷信かは知らぬが、僕はかやうに信ずる。已上は只僕の實驗にふれた一例に過ぎない。然かし乍ら斯の如き恩

愛は、人の眼を忍んで、世に許多あるだらうと信ずる。否、許多どころではない、此の如き情愛は、天地の間にみちて居るものかと思ふ、只この満ちてゐる情愛慈悲にふれて居ながら、これを感じるに鈍き我々の心こそ、實に遺憾至極である。是れは昨年十一月の、「實業の日本」と申す雜誌の上に顯はれた、新渡戸博士の御話であります。實に難有い實例である。吾も人も、皆この通りの親の御恩を受けて居る。自分の眼には見えずとも、心の上には知らずとも、親の御恵みを受けて居るは確かである。近く思ふと云ふことは此處である。其御恩に氣付いて見れば、親の御恩は「孝經」の中の話でない、小學校の讀本の中の話でない、自分の身體の存する所、凡て親の御恩の固まりである。寢ても起きても

親の御恩は私の體に附隨して居る。此處に氣付いたのが、即ち親の御恩を近く思ふた人である。此味ひを以て、如來の御慈悲を喜んで行きたいものである。次に「御一代記聞書」の文を拜讀いたします。

一。同仰に云、佛法をばさしよせていへ、ご仰せられ候。法敬に對し仰られ候。信心安心ごいへば、愚痴のものはまたもしらぬなり。信心安心なごいへば、別の様にも思ふなり。たゞ凡夫の佛になることををしふべし。後生たすけ玉へご、彌陀をたのめご云へし。何たる愚痴の衆生なりごも、聞て信をさるべし。當流には、こ

れよりほかの法門はなきなりご仰られ候。

五。實に蓮如上人の仰せの如く、佛法を話す方も手近くさしよせて話し、聞く人も、手近くさしよせて聞きたいものである。信心安心と云へば、愚かな者は、別の事のやうに思ひ、亦信心を得て淨土往生すると云へば、自分の信心を以て、如來の御助けを買ひ取る事のやうに心得る人がある。そこが蓮如上人の御心配下されたところで、如來の御慈悲は、そんなむつかしいものではない。此機のなりで、命終り次第に、凡夫が佛にして貰ふことである。故にたゞ凡夫の佛になることを教ふべしと仰せられた事である。前にも申す通りに、明治天皇の御恩澤は何處に在るか、遠いところではない、現在の私の身上に在る。親の御恩徳は何處に在る

か、現在の私の身上に在る。如來の御慈悲も其通りである。今の私の身上に、御慈悲の注がれて居る事に氣づかねばならぬ。私共が朝夕に念佛申すことが、早や御慈悲の顯はれである。故に親戀聖人は、一遍の念佛にても、彌陀の御催しにあづかる事ぢやと仰せられる。念佛を申して居るのが、自分の力ぢやと思ふならば大いなる誤りである。彌陀の本願に於て、我が名を、十方衆生に唱へさせずば置くまいと御誓ひになつたが、其本願力が顯はれて今日の私共が念佛を申して居る次第である。然らば私共が、一遍の念佛を申す處にも、如來の御慈悲は生きて顯はれて下されてある、かやうに如來の御慈悲を聴聞する氣になつたも、私の力ではない、偏へに他力の御催しである。世間の諺に、袖の振合多生の



縁ご申すことがある。右から来る人ご、左から来る人ごが、互に袖と袖と振り合ふことすらも、幾世の因縁であるご云へば、今私共が、此如来の御慈悲を聴聞すると云ふは、一朝一夕の因縁ではない。御慈悲の綱が、幾重も幾重もかゝつて居るのである。此處に氣が付いて見れば、遠い御慈悲でなくて、極めて手近い御慈悲である。「觀無量壽經」の中に、韋提希夫人が釋迦如来に向つて、我がために、未來は悪人を見ず、惡聲を聞かず、安樂自由な處に行きたいから、其教へを知らせて下されと願ひし時、釋迦如来の御答へに、阿彌陀佛、此を去ること遠からすと仰せられた。韋提希夫人の方では、阿彌陀佛と申す御方は、遠方に御座る御方ちやご想像して居たに、釋尊の御答へには、今其方の身の上に顯はれ

て御座る、此を去ること遠からすと仰せられた。何故なれば、そも、韋提希夫人が、彌陀の淨土に往生したいご云ふ、願ひ心の起つたと云ふのが、韋提希夫人の力でなくて、何卒して、煩惱罪惡の苦しみを救ふて、我が淨土に迎へ取てやりたいごの、彌陀の御慈悲が、韋提希夫人の心の上に輝いたから、今日まで娑婆の榮耀榮華に執着して居た韋提希夫人が、最早や此娑婆はいやである何卒して彌陀の淨土に往生したいものちやご、彌陀の母様を慕う心が、早や此親心を知らせて、安心させてやりたいの彌陀の御慈悲の顯はれである。そこが阿彌陀佛ごを去ること遠からすと仰せらるゝ處である。私共も韋提希夫人と同じ事である、淨土往生をしたいものちやご、願ふ心が、即ち阿彌陀佛の、汝一心正念に

して直ちに來れ、我れよく汝を護らんと、御喚聲の顯現である  
 然らば私は、現在只今、如來の御慈悲に包まれて居るではないか  
 其包んで下されてある御慈悲が、未來間違ひなく淨土往生を遂げ  
 させて下さる御慈悲である。如來の御慈悲の上には、第一種の第  
 二種のと云ふやうな區別はない。現在私を包んで居て下さる御慈  
 悲が、未來の淨土往生をさせて下さる御慈悲である。此現在の御  
 慈悲に氣づかせて貰へば、私共の淨土往生については、何にも條  
 件はない、眞に此氣のなりの御たすけである。此機のなりで佛に  
 して貰ふことである。故に蓮如上人が、信心安心など廻り遠い事  
 を話さずに、只凡夫の佛になる事を教ふべしと仰せられたのであ  
 る。

六。この現在の御慈悲、久遠劫の昔から、今日まで御恵み下さ  
 れ、御育て下された御慈悲に、氣付かせて貰ふた時の心持ちは、  
 後生たすけ玉へと彌陀をたのむ思ひである。眞實の親の御慈悲が  
 分れば、すがるな、たのむなど拒絶されても、小供の方では親に  
 すがらずには居られぬ。たのますには居られぬ。故に蓮如上人の  
 御示し下された彌陀をたのむの味は、親の御慈悲の知られた一念  
 の心持である。行者の方から、無理に起すたのみ心ではない。親  
 心の知られた時、自然に起るたのみ心である。如來の御慈悲の知  
 られた心持である。まるの他力とは即ち此事である。此現在の御  
 慈悲に氣づかずに、只後生たすけ玉へと云ふて居る間は、十年た  
 つても、二十年たつても、安心することは出來ませぬ。安心が出

來ぬ筈ぢや、まだ御慈悲が知られて居らぬからである。若しも小供が、今現在に母親が、私を慰れみ可愛がつて下さると、現在の御慈悲が確と知られると、病氣になつた時にも御棄て下されず、川の中に落ちこまんとしても御棄て下されず、末の末まで私を護つて下さる母親ぢやと安心することが出来る。即ち一念の安心は永劫の安心で、現在の御慈悲に氣づいた時に、未來後生の問題も皆安心することが出来る。今現在に私に加わられて居る御慈悲に氣付かずに、未來後生だけの御慈悲を知らんとするのは、甚だ道理にはづれた事である。故に蓮如上人は、佛法をばさしよせて話せと仰せられ、信心安心と云へば、別の事のやうに思ふたり、淨土往生の條件のやうに思ふたりするから、只直接に、凡夫の佛に

なることを教へよ、此まゝたすけ玉ふ御慈悲を知らせよ、其御慈悲の知られた一念に、信心も安心も、彌陀をたのむ味ひも皆具足するのであるから、其心持を次に言ひ顯はして、後生たすけたまへと彌陀をたのめと云ふべしと仰せられたものである。秀存講師の御法話に、彌陀をたのむと云ふは、御たすけの邪魔をせぬことなりと仰せられてありますが。如來の御たすけの喚聲が先手で、御邪魔をせずに、後生たすけ玉へと、すなほに信順するのが後手である。この現在の御慈悲が知られて見れば、自分の一身は、何處をおさへて見ても、如來の御慈悲のかゝらぬ處はない。蓮如上人が疊をたゞき、衣の襟をなでさせられて、我は南無阿彌陀佛にまるめられたるよと仰せられたは、此現在の御慈悲を喜び玉ふ御

心持と窺はれまする。

### 第十八回 水よく石をうがつ

一。人間は何事をして、熱心でなければならぬ、忠實でなければならぬ。熱心と忠實とを缺では、何事も成功することは出来ぬ。故に孔子は「論語」の中に、「學を好む」と云ふことを痛切に教へられてあります。學問の成功する道は何であるかと云へば、學を好むと云ふより外はない。故に魯の哀公が孔子に向つて、弟子誰か學を好むと爲すと尋ねられた時、孔子の御答へに、顔回なる者あり、怒りを遷さず、過を二たびせずと稱讚せられ、其天折をせられた事を深く歎いて、顔回の死後、またと學を好む者がな

いと仰せられてあります。伊藤東涯先生の御意見では、「論語」の一篇は、好學の道を教へられたものであると申されてありますがいかにも達見であります、孔子御自身も、十室の邑、必ず忠信丘が如き者あり、丘が學を好むに如かざるなりと申されてあります。丘とは孔子聖人の御名前前で、いかに小さい村でも、其村の中をよく調べると、必ず相當の才子もある、忠信を有する人もある、才や忠信の點で云ふならば、丘の如き人は少くない。然かし學を好むこと、丘が如き者がない。是れ道に進み、聖賢の域に昇ることの出来ぬ原因ちやと申してあります。伊藤仁齋先生は、さきに申した東涯先生の御實父であります。日本の儒者の中に於ても、またと並びのない學者であります。私は猥りに人を尊敬せ

ぬ方でありませんが、仁齋先生父子をば、どうしても先生の二字を  
 はなして、其御名前を呼ぶことは出来ませぬ。仁齋先生御自身の  
 文章に、自己の御經歷を述べて、予は少年の時より、山にも遊び  
 川にも遊び、花も観、月も眺めた、若くは演劇も観、歌舞も見た  
 然かし其見聞の間に於て、學問の事は少くも忘れた事がない。否  
 其等の見物遊山も、皆學問のためである。聖人の學は人間の學問  
 である、人情に通せずしては、聖人の學にも通ずることが出来ぬ  
 仁齋先生は、机の上の學問ばかりではない、一切世間の事、見る  
 事聞く事、皆學問の資料であつた。故に先生自から申されるには  
 予が性質は魯鈍な達で、取るべき處は一もない。然かし好學の一  
 事に至つては、聖人と雖も敢て遜らずと切言せられました。此學

を好むの性質が、終に仁齋先生をして、一代の大儒たらしめ、萬  
 世の師表たらしめたる原因である。好めば熱心になる、熱心にな  
 れば必らず成功する。佛法も好まねばいかぬ、好めば必らず聽聞  
 する、聽聞すれば必らず如來の御慈悲が分る。御慈悲の知られた  
 時が、安心の出来る時で、求めずして自から信仰は生ずるのであ  
 る。蓮如上人の「御一代記聞書」に就ては、古來種々に講釋をせ  
 られてある。然かし其多くの講釋の上に、私は唯一言申し添へて  
 置きたい事がある。それは外ではない、此御聖教の大綱について  
 の事である。私の意見では、「御一代記聞書」は、三百十六箇條よ  
 り成り立て居りますが、其大綱を申せば、佛法を好むべき事を教  
 へられたものである。好まねばいかぬ、好めば必らず信心が得ら

れる、彌陀をたのむ味ひは自然に生じて来る。其一一の例證を舉る暇はないが、處々に此趣意が顯はれてある。その二三を舉げて見れば、即ち次の如くである。

一。佛法には、世間のひまを闕てきくべし。世間のひまをあけて、法を聞くべきやうに思ふこと、淺間しきことなり。佛法には、明日と云事はあるまじき由の仰に候。たごひ大千世界に、みてらん火をもすぎゆきて、佛の御名をきくひごは、ながく不退にかなふなりと、和讃にあそばされ候。

一。同行善知識には能々ちかづくべし、親近せ

ざるは雜修の失なりと禮讚にあらはせり。惡き者にちかづかば、それにはならじと思へども、惡事よりくへき由仰せられ候。只佛法者には、なれ近づくべき由仰せられ候。

一。前々住上人仰せられ候。人の佛法を信じてわれによるこばせんと思へり、それはわろし、信をこれば自身の勝徳なり。さりながら、信をさらば、恩にも御うけあるべきと仰せられ候。また、聞きたくもなき事なりとも、まことに信をこるべきならば、きこしめすべき由仰せられ候。

一。法敬坊、九十まで存命さふらふ。このごし  
 まで聽聞まふしさふらへごも、これまでご存知  
 たるごごなし。あきたりもなきごごなりごまふ  
 されさふらふ。

一。前々住上人仰せられ候。信決定の人を見て  
 あのごごくならではご思へば、なるぞご仰せら  
 れ候。あのごごくなりてこそご、思ひすつるご  
 ぞ、淺間しき事なり。佛法には、身をすてゝの  
 ぞみ求むる心より、信をばうるなりご云云。

一。いたりてかたきは石なり、至りてやはらか  
 なるは水なり。水よく石をうがつ、心源もし徹

しなば、菩提の覺道、何事か成ぜざらんごいへ  
 る古き詞あり。いかに不信なりごも、聽聞を心  
 に入れ申さば、御慈悲にて候間、信をうべきな  
 り。只佛法は聽聞にきはまるなりご云云。

二。ま 其他にも、此やうな御化導は澤山ありますが、今は手  
 近い處の 簡條を挙げただけであります。此五簡條の中にも、  
 第五番目、水石の御警諭に就て、蓮如上人の思召を窺ふことに  
 致します。是は「御一代記聞書」では、第九十三條に當ります  
 が、まことに名高い一簡條でありまして、多くの人の耳に聞きな  
 れて居る御化導であります。一番堅いものは何ちやと尋ねたら、  
 小兒でも女でも、石が一番堅いと申すであります。また一番や

はらかい者は何ちやと尋ねたら、やはり水がやはらかいと答へるに違ひない。其やはらかい水が、屋根の上から一滴づゝ落ちて居ると、終には堅い石の上に、孔をあけるが世の中の道理である。して見ると、いかに佛法の事が分らぬと云ふても、精神一つである。精神が徹底すれば、必らず佛果菩提に到られる。水の流れるは必らず源がある、源が清んで居らねば、下流は濁りを生じて来る。下流の清まんことを欲するならば、源の水から第一番に清ませねばならぬ。精神は、萬事萬物の源である、苦しむのも心から樂しむのも心から、成功も心から、失敗も心から、心が凡ての源である。そこで古人も、「植ゑて見よ花の開かぬ里はなし、心からこそ身はいやしけれ」と申されてあります。精神が萬事の源であ

るから、法と譬と並べ舉げて、心源と仰せられたものと見えますこの心源もし徹しなば、菩提の覺道何事か成せざらんとこの御言はいづれ自力修行の門に於ての、策勵の御言と窺はれますが、今は其言を引事にして、他力信心も其通りで、精神一つが堅固になつて、たとひ火の中を分けても、聽聞すると云ふ精神になれば、いかに不信心の人も、必らず信心は得られるものちやと、御示し下されたものである。本文の上に、古き詞ありと申されてあります。が、先輩の御方も、其御詞の出處が明かでないと申してあります。知らざるを知らざるこそよ、是れ知れるなりと、古人も申されてある事故、出處の分らぬ事は、分らぬといたして置けばよい。然かし今一番大切な事は、御詞の出處ではなくて、其詞の精神の存



する所である。其精神さへ汲み得たならば、蓮如上人の思召を聴聞した人と申されます。この上人の思召が受けられたら、佛法を好む事に精神を定めねばならぬ。好めば必らず聴聞する、聴聞すれば必らず信心が得られます。

三。嘗て英國に、一人の寡婦がありました、三人の男兒を養育して居りました。其長男が二十才に達しました時に、一日母親はその子を膝許に呼びよせまして、御前は何の職業をしたいか、自分の希望を述べて見よと申しました。其時長男が申すには、私は海軍士官になりたくあります。母が申すには、折角の望みなれども、こればかりは已めて貰ひたい。御前も承知の通り、父上は早く此世を去られ、この母の手一つで、三人の兒供を教育して來

た中に、特に御前は長男で、母が第一に力にして居る者である。然るに海軍士官に成て仕まへば、三年に一度か、五年に一度しか御前の顔を見ることが出来ぬ。陸上に居る仕事ならば、教育家になつてもよし、商人になつてもよし、畫家にならうが音楽人にならうが、御前の望み通りである。たゞ海軍士官になる事だけは、是非に思ひ留まつて貰ひたいと云ふ。然かし息男はなかく聞入れぬ、是非に海軍に出たいと願ふてやまぬ。そこで母親は、二三日御前も篤と考ねて見よと申されました。さて二三日を経て、其意見を尋ねて見ましたが、長男の方では、やはり海軍士官よりほかに、何の思ひつきも起らず、是よりほかに何の望みもありませんと云ふ。母親も此上は是非に及ばずとて、終に願ひの通り海

軍に出ることを許しました。然るに哀れな事には、其長男は、望み通りに海軍士官にはなりませんが、或時軍艦が沈没して、其子も終に海底の藻屑と消え果たので、母の歎きは、一通りや二通りの事ではありませんでした。さりながら、いかほど歎いても歸らぬこと、唯これまでの運命と明らめて、二男三男の成長を樂みにして居りましたが、その二男が二十才に達した時に、母は例の如く膝許に呼よせて、何の職業を選ぶべきか、其子の意見を聞きましたところが、意外にも、やはり海軍に出たいと云ふ。母は大に驚いて、其方の承知の通り、力にして居た兄さんは、無理に海軍に出て、終に海底の藻屑と消え果てたが、せめて御前なりとも、陸上の仕事をして、母を安心させて呉れるやうにと諭しましたが

二男が申すには、母の御言はさることながら、私の希望を申せば海軍士官より外に、何の望みもありません。教育家になる事も、音楽家になる事も、更に望みは御座りません。若し御許しがあるならば、海軍に由て身を立たいと申し述べた。此上は是非に及ばずとて、母は終に其願ひを許しました。間もなく第三男が二十才に達したから、母はいつもの如く膝許によびよせて、其意見を聞いて見ると、この三男も、また船乗になつて、海上生活をして暮らしたいと云ふ。此一言には母も魂を失ふばかり驚いて、御前は何を言ふか、上の兄さんが二人までも海軍士官になりて、母の傍を離れて仕まつたに、御前までも船乗りになることは、あまりと云ふても親の心を察せぬと云ふものである。今は其方一人を力にして

居るほどに、何商買をしてもよいが、陸上生活をして貰ひたいと論しましたが、三男の方では、是非とも船乗りになりたいと云ふ母も其剛情なるに驚いて、これは並々の手段では引留る事は出来ぬ。徳の高い名僧を頼んで、説諭をして貰ふに如くはない。或はまた何物か此家に崇をして、三人の息男を奪ひ取んとする、悪魔の仕業でもあるならば、名僧の力を以て、その悪魔を退治して貰はんものと、右の次第を、當時名高い僧侶の御方にたのみました處が、その高僧も此家に臨み、母親の一部始終の話を聞きました。が、どうしても不審にたねられぬ。いくら考ねて見ても、悪魔の祟とは思はれぬ。さればさて、何故三人の息男が、そろひもそろうて海上生活を望むとは、どう考ねて見ても譯が分らぬ。そこで

兎も角も、この息男達が、子供の時から、讀書をしなり遊戯をしたり、平素寢起をする室があるならば見せて貰いたいと申し出た。そこで母親は、二階の一室に案内して、これが、三人の息男が、少年時代から寢起をいたす室でありますと云ふのか、高僧は其室を見廻はすと、室の正面に、一枚の額が懸つて居て、其額面には一艘の帆船が、勢よく浪を切つて進んで居る畫が書いてある。高僧はキツト此畫に眼をつけて、暫らく睨んで居ましたが、此額は何年時分からかけてあるかと聞きました。母親が申すには、あの兒達の生れぬ前からかけてあるので、最早や三十年にもなりませうと云ふ。高僧ハタと横手を打て、それで始終譯が分つた。三人の兒供が、二十年の間、毎日毎日この畫を眺めて、こんな勢よき船

に乗て、海上を往來したら、さこそ愉快ならんど、思ふたびに、一分づゝ心の上に刻みつけて、それが二十年間積つて、今の精神となり上つて、海上生活をしたいと希望するのであるから、二十年間に積み上げた思想を、この老僧が、五日や十日説論しても、聞入れる筈がない。此上は海上生活を許すより外に道はないと申されたので、母親も始めて得心して、其兒の願ひを聞き入れたと云ふ事でありませう。

四。顔面の書は、物も言はぬ、精神もない。然かも十年も二十年も、其書に對して居れば、どうしても動すに動かされぬ一箇の精神が出来る。これが物の感化と云ふものである。故に人と交はれば友を選び、書物を讀めば聖賢の書を選び、師匠を求むれば、

徳ある人を師匠に仰がねばならぬ。故にソクラテスの話に、親は我兒がいかほど善良な性質ぢやと信じて居ても、兒供の前で、鄙猥い話をする者はない。なせならば、いかに善良な兒供でも、話を聞いて居れば、其事が心にしみこむからであると申してあります。誠に大切なことであります。兒供を教育する上にも、自分に信仰を求むる上にも、深く注意すべき事でありませう。私が明治二十五年に、始めて京都に参りました時に、下宿して居た家がありました。其家には随分長く御世話になりましたが、其家は五代も六代も、酒屋をして居りました。然るに今の主人が、二十才時分までは、酒が嫌ひで嫌ひでならぬ。酒の香を臭でも、直ぐ頭痛が起ると云ふ風でありましたが、親類中の人が勸めて、よしや酒は嫌ひ

にしても、せめては酒の善悪の味が分らなくては、商買が出来ぬから、是非に二三杯は飲まねばならぬと、無理に勧めらるゝ、道理は尤もであるが、どうしても酒は飲めぬ。然かし親類や親兄弟の勧めもあるので、毒を飲む思ひをし乍ら、一二杯づゝ試みて居りました。後には酒の善悪の分る位ではない、仲々の酒好になりまして、朝のむ、晝のむ、夜のむと云ふ風で、終には家の財産の八分通りも飲み倒し、最後に大阪の親類に参りまして、五六日逗留の中に、充分酒の御馳走になつたのが基で、京都に返るなり病氣になつて、終に死んで仕まひました。一時は家の運命も哀れでありましたが、今日では其子供が皆成人して、再び家運も盛んになりましたが、一時は随分哀れな有様でありました。蓮如上

人が、御一生涯の御化導に、佛法好になれと仰せられるは此處である。私は物覺わが悪い、私はたのむ味が分らぬ、私は信の一念の姿が分明しませぬと云ふ人があるならば、四百年前に生れ直して、蓮如上人に直に御眼にかゝつて御話を窺つても、佛法好になれと仰せられるより外はありませぬ。信の一念も、たのむ味も、口に言はれる處はまだ浅い處である。眞の温味のある處は、如來の御心と私の心と、直接に觸れる處に在る。如來の御心と私の心と、直接觸れるには、如來の御慈悲を聽聞するより外に道はない。そこが蓮如上人の、いかに不信なりとも、聽聞を心に入れ申さば御慈悲にてさふらふあひだ、信を得べきなりと仰せられる處であります。梅の花の香ひのよいと云ふ事は、清らかな香ひがすると

か、水のやうな冷やかな香であるとか、それまでは言はれるけれども、それ已上の實地の香ひは、自分に梅の香を嗅ぐより外はない。御慈悲の香ひに實地に觸れて見れば、たのむ一念の香ひも、安心した香ひも、自分で心に會得することが出来る。それ故に、第一には佛法好になつて、火の中を分けても聽聞すると云ふ心にならねばなりません。

五。然かし乍ら、此處に一つ注意すべき事は、いかに佛法好になり、いかに熱心になりたればとて、自分の聞きやうが上手であるために、信心が得られると思ふならば、大いなる誤りである。梅干を喰べて酸味を感じるのは、自分の喰べ方が上手であるから感ずるのではない。老人が喰べても小兒が喰べても、智者か喰べ

ても愚者が喰べても、一口喰べれば酸く感ずるといふは、梅干の方に酸味を起す徳が備はつて居るからである。然るに梅干に徳のあることを忘れて、自分の喰べやうの上手なために酸味を生ずること思ふならば、大いなる誤りではあるまいか。信心を得るため、如来の御心を知らせて貰ふためには、佛法好にならねばならぬ、熱心にならねばならぬ。されど我が熱心なるため、我が聞きやうの上手なるために、信心が得られると思ふてはならぬ。そこを蓮如上人は、御慈悲にてさふらふ間、信を得べきなりと仰せられたものである。此處に法然上人の御化導を合せて聽聞すれば、一層明かになるかも知れません。即ち御傳鈔の信心諍論の處に、佛智他力より賜はる處の信心は、源空が信心も、善信房の信心も、更に

かはることなし、我がかしこくて信する非すと仰せたるは此意味  
 であります。いかな愚かな人も、いかな不信心な人も、聞く機に  
 なつて聴聞すれば、御慈悲であるから信心が得られる。如來の御  
 まことであるから、私の心にいたり届いて下される。如來のまこ  
 と心と、凡夫の心と觸れる處は、言亡慮絶で、口に言ふことの出  
 來ぬ處である。「忠臣藏」の四段目を見ると、鹽谷判官高定が、い  
 よく切腹いたさねばならぬ境遇になつて來た。今はの別れに、  
 家老職の大星由良之介に、たつた一目遇ひたいものぢやと、切腹  
 を差控へて待て居るが、檢視の役からは、切腹をせき立てられる、  
 判官もたまり兼ね、力彌を膝許に呼びよせ、力彌、由良之介はま  
 だかと催促をいたす。力彌は起上つて花道の方を見上げるけれど、

更に由良之介の影は見ぬ。判官の前にひざまついて、いまだ參  
 上仕まつりませぬと報告を申し上げる。判官はやゝ暫らくたつて、  
 また力彌に向つて、力彌、由良之介はまだかと云ふ、力彌は再び  
 起上つて、キツと當りを見舞はしたが、やはり由良之介の影は見  
 ぬ。力彌は御前に手をついて、涙の聲をふるはせ乍ら、いまだ  
 參上仕まつりませぬと申上げる。判官今はたまりかね、これまで  
 なりと、三方引寄せ、九寸五分を手取るや否や、左の脇腹に突  
 き立てる。此時早く彼時おそし、花道の方に當つて急遽しき足音  
 がする。見れば待兼ねた由良之介である。由良之介も主君の姿を  
 一目見るより、馳寄たいは山々なれど、檢視の役人の手前もある、  
 遙か末座に差俯ひてゐる。檢視の役、石堂馬之丞は、この君臣

の心の中を察しやり、國家老由良之介とは其方か、由良之介、苦  
 しい、近う近うと呼かけられて、由良之介は思はず判官の前  
 に進み出で、由良之介で御ざりますと申上れば、判官苦しき息  
 をつき、遅かりし由良之介、様子は定めて、國許にて聞たであら  
 う、聞たか、聞たか、無念、無念口惜しい。此九寸五分は其方に  
 かたみと、息もたわく／＼に遺言する。由良之介は御前にひれ伏し  
 此期に及んで何をか申さん、たい潔よき御最後のほど、願はしう  
 存じますと申す、言ふにや及ぶと判官は、左より右に引き廻はし  
 喉笛かき切り陥入りて仕まふ。由良之介は、九寸五分を受取りて  
 推頂いて一禮し、眼光するごとく、切先の血潮を眺める處に、早や  
 判官の遺言と、由良之介の得心とが顯はれて、復讐の精神は舞臺

の全面に満ちて居る。芝居で見ても、誠に悲痛壯烈な場處である。  
 私か思ふに、判官の切腹してからの遺言は、舌はこわはり、口は  
 まはらず、言ひ方としては、誠に聞きにくい言ひ方である。然る  
 に由良之介が、一言の下に、判官の心を汲み得たと云ふのは、全  
 く判官の最後の一念のまこと心と、由良之介の熱心とが、互に通  
 じあつた結果である。判官がいかにか聞かせやうと思ふても、由良  
 之介の方がぼんやりして居ては、判官の心は通らぬ、由良之介が、  
 いかにか熱心に聞かうとしても、判官にまこと心がないならば、由  
 良之介に透るはづがない、然れば判官の言の云ひやうが善くて、  
 由良之介の心に透つたのではない、一念こめたまこと心が透つた  
 のである。説教や演説の、言ひやうが、上手で信心が得られるの



ではない。蓮如上人の仰せの如く、御慈悲にてさふらふ間、信を得べきなりで、全く如来のまこと心が透つて下さるから、御慈悲一つに安心が出来て、往生一定の思ひに住することが出来るのである。

六。聞く機になつて聴聞すれば、如来の御まことは必ず透つて下される。親の御慈悲ぢやもの、悪人正機の御本願ぢやもの、佛かねて知しめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願は、かくの如き罪惡深重の私一人のためぢやと、御まこと一つ頂いて見れば、何の手間ひまの入た事ではない。不可思議の願力として、佛の方より往生は治定せしめ玉ふのである。此御慈悲の親心と、私の心とが、互に觸れ合はれた時が、後生たすけ玉

へと、眞に彌陀をたのむ心が起るのである。其機のなりでたすけるこの、佛の御慈悲が聞へたから、たすけ玉への思ひになられるのである。此より已後の生活は、蓮如上人御一代の御化導の通り、たゞ佛恩報謝の念佛より外はない。娑婆の不自由な生活をするにつけても、我が身の罪惡の深きことを思へば、今日まで三惡道に沈みもせず、此御慈悲を聞きつけるまで、生活した事が、早や一大不可思議である。それを思へば、不自由どころではない、たゞ勿體ないばかりである。此處に至て、信仰と人生とが一致して、此不自由な人生の上に、自由な精神を起させて貰ふことである。これが信仰の尊い處であります。いくら詳しく申しても、いくら丁寧な御話しいたしても、御慈悲の極處は、この罪惡深重の私を

此まゝなりで御たすけ下さるの思召より外はない。初めの間はこの御慈悲を聴聞し乍ら、このまゝの御たすけとは、いかなる不思議の御慈悲ぞと、御慈悲一つが力にならずに、自分の足許を眺めて、何か物足らぬ心地がする。物足らぬと云ふのが、御土産を持って行きたい積りである。御土産の出来るのを待て居ては、一生涯たつても出来る事はない。何の御土産もいらず、煩惱の泥足なり御たすけぞと、如來の親心の知れたのが、即ち彌陀をたのむ思ひで、眞實信心と申すことも、これより外にあるべき筈はありません。何卒、幾度も聴聞して、如來の親心の知られるまで進みたい事であります。

### 第十九回 攝取不捨のことはり

一。中村春雨氏の書れた「無花果」と云ふ小説の中に、私共の宗教的に玩味すべき話があります。小説の主人公は、鳩宮庸之助といふ一青年であります。この青年が、或醫者の内に書生をいたして居る間に、お澤と申す妙齡の婦人に戯むれ、終に其婦人の節操を弄びました。鳩宮とお澤との間には、或は秘密の約束でもあつて、他日夫婦になるべき誓ひが有たのか知れませんが、兎も角も一往は清淨に相別れて、かの青年は遙々萬里の波路を越へ、米國に學問修行に出かけました。鳩宮は米國に居る中に、基督教の説教を聞き、人間の罪深きこと、特に我身の過去を顧りみて、他

人に話しにくい秘密の罪あることを思ひ浮べ、いよ／＼神の救ひに預からねば、人生に生きて居ることも出来ぬやうに感じて、終に自から進んで洗禮を受け、基督教の牧師となつて、神の救ひの難有い事を、他人に説き聞する程の身分と成り、彼國の美人、恵美耶と申す女を妻に迎へ、十年の星霜を経たる後、新婦の手を携へて、再び日本に歸りました。鳩宮の精神の上では、自分は往日は處女を弄び、罪惡を犯したに違ひはないが、今日では已に神の救ひを蒙むり、神の力に由て罪を清められて居る身分である。往日はお澤に弄れた事もあるが、それは一時の青年の免がれ難い罪惡で、今は十年の歲月を経たことであるから、お澤も定めし相當の家に嫁し、温かき家庭を作つて居るであらう、我も恵美耶を迎

わて純潔な家庭を作つた、こんな嬉しい事はないと、深く心中に喜んで居た。彼は日本に歸るや否や、我心の有様を告白せんと、一夜教會堂に立て説教を爲し、且つは十年已前の罪惡を懺悔して諸人の前にこれを披瀝し、神の救ひに預かつた事を感謝いたしました。

二。然るにお澤の方は如何にと見るに、鳩宮に別れた後、どうしても彼れを忘るゝ事が出来ぬ。一日も早く鳩宮が歸り來つて、二人共に樂しき家庭を作らんものと、自分ひとりで想像を描いて居る、そんな事があらうとは、夢にも知らぬ彼女の父母は、良縁を求めて嫁せしめんものと、心竊かに縁談を求めて居ましたが、終に相當の良縁を見つけて、お澤に結婚を勧めました。お澤の方

では、心の秘密を打明けける事は出来ず、さりごとく父母の言にも背き得ず、心の中では本意なく思ひながら、終に結婚いたしました然るに結婚して見ると、今の良人よりも、往日の鳩宮の方が戀しくて、どうしても忘るゝ事が出来ぬ。こんな事なら嫁に来ねばよかつたにど、色々以案じ煩ふた果、終に一計を案じ、毒薬を以て良人を殺害した、此事忽ち露顯して罪に問はれ、囚人となつて東京巢鴨の監獄に投せられた。鳩宮に於ては、こんな事は夢にも知らず、一日教誨をなさんがために、巢鴨の監獄に參り、多くの囚人共を集めて、色々訓誨をいたして居りましたが、不圖目の前を見ると、何ぞ計らん、十年前に別れたお澤は、今や囚人となつて此牢獄の中に泣いて居る。お澤も驚いたが、鳩宮は一層驚いた。

鳩宮は終に教誨を中止して家に歸りました。家に歸つた上で、お澤の身の上を聞いて見ると、囚人となつた原因は、他人ではない、全く自分である事が分つて来た。此に於てか鳩宮は、胸中に波濤の湧くが如く苦悶が湧て来た。憐れなる彼女を奈何せん、我は彼を弄んだ後、全く彼を忘れて、新たに恵美耶を娶て居る。お澤を救はんとすれば、自分の過去の罪惡を、明白に世の中に出さねばならぬ。教會堂に於て懺悔をいたした時は、唯茫然と一婦人に戯れたこの告白であつて、決してお澤とは明言せなかつた。今はお澤は我がために墮落の緒を作られて、明かに罪人となつて居る。彼を救ひ出さんとすれば、我身の名譽は一時に失墜する、事によると恵美耶にも悲みをかけねばならぬ。曩には神に由て救はれた